

## 四街道市館ノ山遺跡(2)

— 物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書XV —

平成25年9月

独立行政法人 都市再生機構

公益財団法人 千葉県教育振興財団

よつ かい どう たて の やま  
四街道市館ノ山遺跡(2)

— 物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書XV —



## 序 文

公益財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第718集として、独立行政法人都市再生機構による物井地区土地区画整理事業に伴って実施した四街道市館ノ山遺跡の2冊目の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、中世の館跡について、新たな知見を得ることができ、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られています。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係者の皆様や関係機関、また、発掘作業から整理作業まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成25年9月

公益財団法人 千葉県教育振興財団  
理 事 長 錦 織 總 夫

## 凡 例

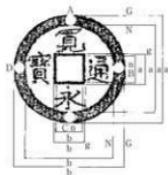
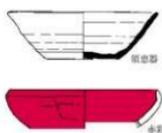
1. 本書は、独立行政法人都市再生機構による物井地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本書に収録した遺跡は、千葉県四街道市物井字館ノ山 678-1 ほかに位置する館ノ山遺跡（遺跡コード 228-020）の（4）・（5）地点である。
3. 発掘調査から報告書作成に至る業務は、独立行政法人都市再生機構の委託を受け、公益財団法人千葉県教育振興財団が実施した。
4. 発掘調査および整理作業の期間、担当者は第1章に記載した。
5. 本書の執筆は、第1章・第3章を主任上席文化財主事 淳一、その他の部分は主任主事大岩桂子が担当した。編集は大岩と主任上席文化財主事山口典子が行った。
6. 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、四街道市教育委員会、独立行政法人都市再生機構の御指導・御協力を得た。
7. 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。

第1図 国土地理院発行 1/50,000 地形図 「成田」(NI-54-19-10-3)・「東金」(NI-54-19-11-4)・「佐倉」(NI-54-19-14)・「千葉」(NI-54-19-15)を合成使用

第7図 物井地区館ノ山遺跡地形測量図（平成11年房総測量株式会社に測量委託）

上記以外は、住宅・都市整備公団（当時）による物井地区現況図

8. 図版1の遺跡周辺航空写真は、京業測量株式会社による昭和44年撮影のものを使用した。
9. 本書で使用した座標は、日本測地系に基づく平面直角座標（国家標準直角座標第Ⅱ系）で、図面の方位は、全て座標北を示す。
10. 図や記号の用例は、以下のとおりである。



※図面の各測定点については以下のとおり。

$$\text{外貨外径 } G = \frac{Ga + Gb}{2}$$

$$\text{外貨内径 } N = \frac{Na + Nb}{2}$$

$$\text{内訳外径 } ga = \frac{ga + gb}{2}$$

$$\text{内訳内径 } na = \frac{na + nb}{2}$$

$$\text{外 幅 厚 } T = \frac{A + B + C + D}{4}$$

## 本文目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査の概要	1
1	調査の経緯と経過	1
2	調査・整理の方法	4
第2節	遺跡の位置と環境	5
1	遺跡の位置と地形	5
2	周辺の遺跡	6
第2章	遺構と遺物	15
第1節	古墳時代	15
第2節	平安時代	15
第3節	中世	17
1	台地整形区画・溝状遺構	17
2	櫓列	22
3	方形竪穴状遺構	22
4	掘立柱建物	22
5	井戸状遺構	28
6	地下式坑	30
第4節	その他の遺構と遺物	32
1	遺構	32
2	遺物	37
第3章	まとめ	41

## 表目次

第1表	周辺の遺跡	3	第4表	土器観察表	39
第2表	館ノ山遺跡(4)時代別遺構一覧	3	第5表	銭貨計測表	40
第3表	土坑等計測表	18			

## 挿図目次

第1図	館ノ山遺跡の位置と周辺の遺跡……………	2	第13図	SD-025、SA-001、SI-158、SK-373…	23
第2図	館ノ山遺跡(4)・(5)の位置と 上層調査範囲……………	4	第14図	SB-007・008……………	24
第3図	グリッド呼称法……………	4	第15図	SB-009・011……………	25
第4図	物井地区遺跡分布図……………	7	第16図	SB-010・012・015……………	26
第5図	館ノ山遺跡周辺の地形……………	9	第17図	SB-013・014……………	27
第6図	館ノ山遺跡(4)遺構分布図……………	10	第18図	SK-363・364・369……………	29
第7図	館ノ山遺跡中～近世の遺構全体図……………	11	第19図	SK-384・402・406・407……………	31
第8図	SI-159・160……………	16	第20図	土坑(1)……………	33
第9図	台地整形区画……………	18	第21図	土坑(2)……………	34
第10図	SD-020……………	19	第22図	土坑(3)……………	36
第11図	SD-021・023、SD-022……………	20	第23図	出土遺物(1)……………	38
第12図	SD-024・026……………	21	第24図	出土遺物(2)……………	40
			第25図	館ノ山遺跡中～近世の遺構図……………	43

## 図版目次

図版1	遺跡周辺航空写真(約1/10,000 昭和44 年撮影)	図版7	SK-377・380～383・385・387～390
図版2	遺跡全景、遺跡近景	図版8	SK-391・393～395・397～399・401～403
図版3	SI-159・160、H台地整形区画、I台地整 形区画	図版9	SK-363・364・368・369・373・384・406・ 407
図版4	J台地整形区画、SD-020～025	図版10	SK-404・405・408～410、館ノ山遺跡(4) 北東部、館ノ山遺跡(5)確認調査状況(上層)
図版5	SD-026、SB-007～009・011・012・015、 H台地整形区画、SI-158、SK-371	図版11	出土遺物
図版6	SK-365・367・370・372・374・375A・B・ 376・400・407		

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査の概要

### 1 調査の経緯と経過

独立行政法人都市再生機構が実施する千葉県四街道市物井地区土地区画整理事業の事業地内には、多くの埋蔵文化財が存在する。その取扱いについては、千葉県教育委員会の指導のもとに、一部の現状保存地域を除き、記録保存の措置が講じられることになり、公益財団法人千葉県教育振興財団が昭和59年度から調査を実施し、調査成果として平成24年度までに13冊の報告書を刊行している<sup>1)</sup>。

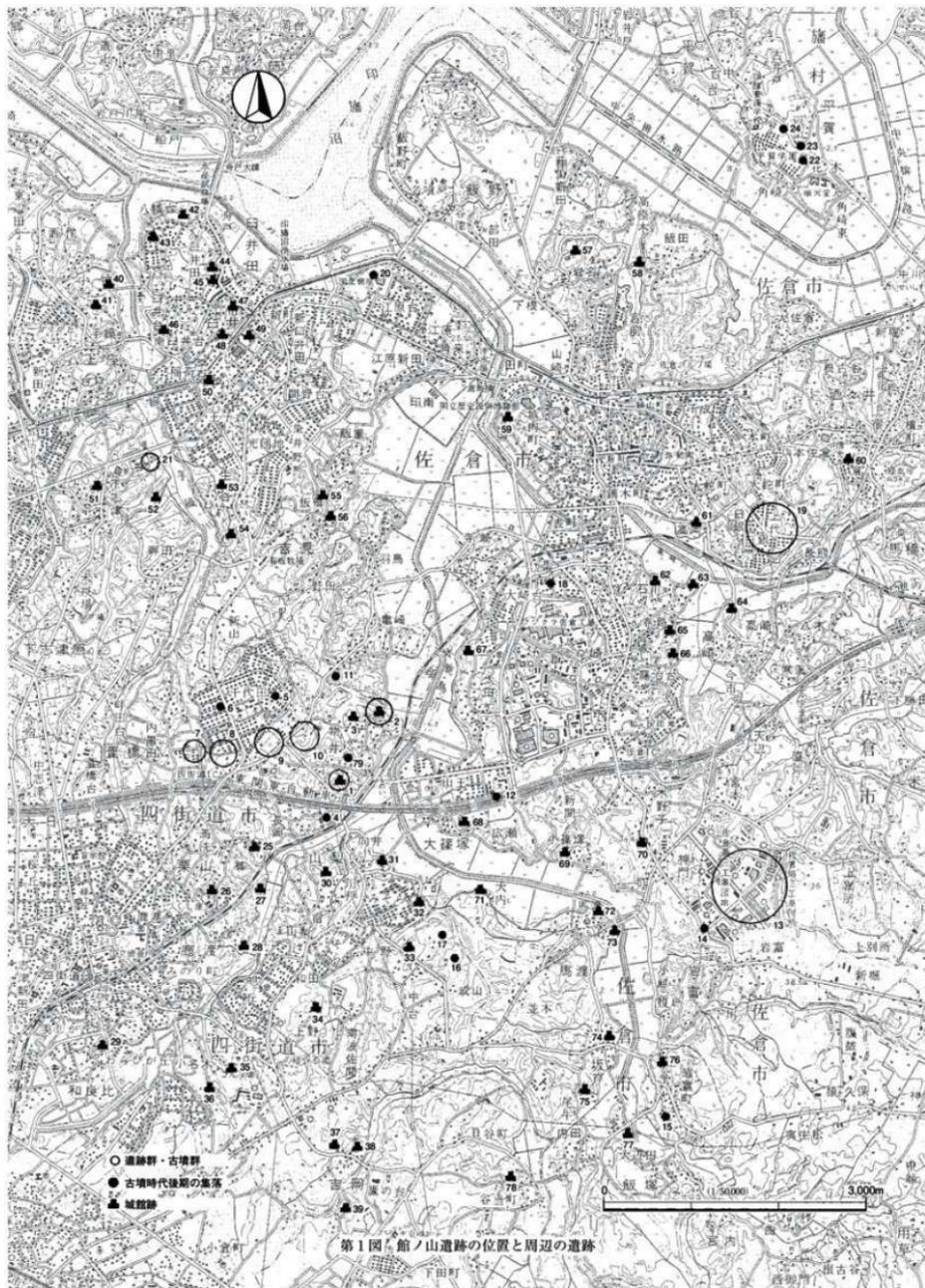
館ノ山遺跡の発掘調査は平成9年度から平成11年度、平成23年度に行われ、平成9年度から平成11年度の調査成果は、「四街道市館ノ山遺跡-物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ-」として平成23年度に刊行した。本書は平成23年度の調査についての報告書である。

平成23年度の調査対象地は2か所に分かれ、館ノ山遺跡(4)・(5)とした。発掘調査の期間、担当者などは以下のとおりである。

平成23年度	調査研究部長	及川淳一
	北部調査事務所長	野口行雄
(4)	調査期間	平成23年7月5日～平成23年11月4日
	調査面積	(規模) 997㎡(確認調査) 上層997㎡/997㎡・下層0㎡/997㎡ (本調査) 上層997㎡・下層0㎡
	調査担当者	矢本節朗
(5)	調査期間	平成23年11月7日～平成23年11月18日
	調査面積	(規模) 656㎡(確認調査) 上層269㎡/656㎡・下層0㎡/656㎡ (本調査) 上層0㎡・下層0㎡
	調査担当者	矢本節朗

整理作業は、平成24年度に行い、平成25年度に報告書を刊行した。

平成24年度	調査研究部長	関口達彦
	整理課長	高田博
	整理期間	平成25年1月4日～平成25年3月31日
	整理内容	記録整理～編集の一部
	整理担当者	部 淳一、大岩桂子
平成25年度	調査研究部長	伊藤智樹
	整理課長	今泉潔
	整理期間	平成25年5月1日～平成25年5月31日
	整理内容	編集の一部～印刷・報告書刊行
	整理担当者	山口典子

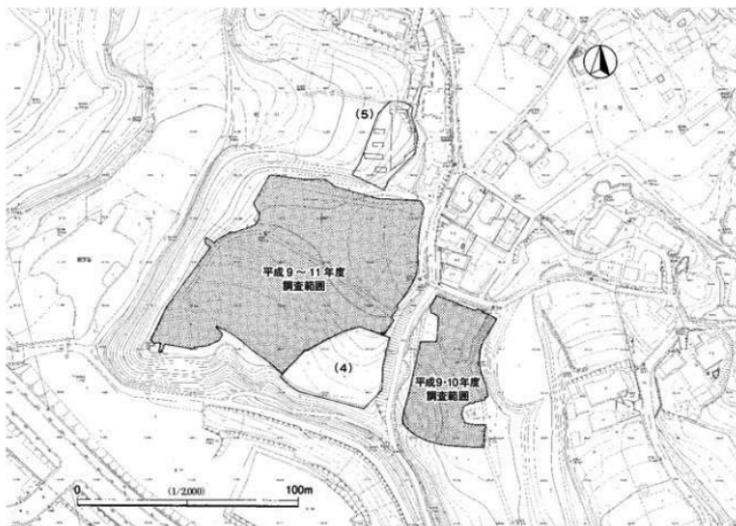


第1表 周辺の道跡

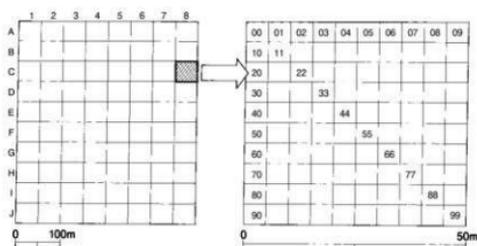
No	道跡名	No	道跡名	No	道跡名	No	道跡名
1	館ノ山道跡	21	飯野作道跡	41	小竹城	61	高岡砦
2	北ノ作道跡	22	駒込道跡	42	洲崎砦	62	時崎城
3	古原城跡	23	油作第2道跡	43	仲台砦	63	石川館
4	入ノ台第2道跡	24	油作第1道跡	44	白井城	64	高崎の場道跡
5	千代田道跡V区	25	大山砦	45	白井城御原敷	65	城城
6	千代田道跡I区	26	池ノ尻館	46	田久里砦	66	金部田城
7	池花古墳群	27	渡渡城	47	白井田宿内砦	67	太田要害城
8	千代田古墳群	28	東作砦	48	稲荷台砦	68	大塚塚城
9	清水・新久・出口古墳群	29	和良比堀込城	49	鎌信一夜城	69	小塚塚城
10	御山古墳群	30	殿台館	50	忍台城	70	神門城ノ内城
11	鶴口道跡	31	東向井城	51	志津大口館	71	馬渡大内城
12	太田・大塚塚道跡	32	中野戸崎砦	52	上峠城	72	馬渡館
13	岩富道跡群	33	中台城	53	生谷館	73	馬渡馬場館
14	岩富明代台西道跡	34	作道跡	54	生谷砦	74	坂戸馬場館
15	岩富漆谷津道跡	35	妙見砦	55	白井屋敷	75	坂戸尾牛城
16	権現堂道跡	36	元堀城	56	吉見城	76	岩富城
17	郷野道跡	37	中山城	57	岩名委山砦	77	原屋敷
18	六崎大崎台道跡	38	福星寺館跡	58	下山砦	78	堀之内城
19	高岡道跡群	39	木出城	59	佐倉(鹿島)城	79	馬場No.1道跡
20	江原台道跡	40	大原館	60	長勝寺館跡		

第2表 館ノ山道跡(4)時代別遺構一覧

時代	遺跡名	遺構番号	遺構数
古墳時代	竪穴住居	SI-159	1
平安時代	竪穴住居	SI-160	1
中～近世ほか	台地整形区画	H、I、J	3
	溝状遺構	SD-020、SD-021・023、SD-022、SD-024、SD-025、SD-026	6
	横列	SA-001 (P-486～488・495・496)	1
	竪立柱建物	SB-007 (P-384～387・448・450・451)、SB-008 (P-473～477・479～482・500、SX-027)、SB-009 (P-350～353・357～359・361・362・364・365・369・371・375・378・388)、SB-010 (P-368・372・389～397・400)、SB-011 (P-354～356・359・361・362・375・392・404～406)、SB-012 (P-340・344・367・414)、SB-013 (P-339・417・432・439)、SB-014 (P-416・426・437・464・469・471)、SB-015 (P-338・339・343・346・434)	9
	方形竪穴状遺構	SK-373 (P-414・415)、SI-158 (P-452・453)	2
	井戸状遺構	SK-363、SK-364、SK-369	3
	地下式坑	SK-384、SK-402、SK-406、SK-407	4
	土坑	SK-365～SK-368、SK-370～SK-372、SK-374～SK-377、SK-380～SK-383、SK-385～SK-391、SK-393～SK-401、SK-403～SK-405、SK-408～SK-411、SK-413、SK-414	41
	その他	SX-022、SX-023、SX-024、SX-025、SX-026	5
	小穴	P-324～337・342・347～349・360・363・366・370・373・374・376・377・379～383・398・399・401～403・407・408・410・413・418～425・427～431・433・435・436・438・440～443・445～447・449・454～462・465～468・470・472・478・483～485・489～494・497～499・502～511	98
欠番	SK-378、SK-379、SK-392、SK-412、P-460、P-473	6	



第2図 館ノ山道跡(4)・(5)の位置と上層調査範囲



第3図 グリッド呼称法

## 2 調査・整理の方法(第1・2表、第1～3図)

物井地区では、事業範囲全城を公共座標(旧座標・国家標準直角座標第Ⅱ系)に基づく方眼網で覆って調査を行っている。方眼は50m×50mの区画を大グリッドとし、名称は方眼網の北西角を起点にして東へ1・2…、南へA・B…として、26Uのように両者を組み合わせて大グリッドの名称としている。大グリッドの区画線の公共座標値(旧座標系)は、第7図に示すとおりである。館ノ山道跡の範囲は大グリッドの24～27列、S～U行となる。

大グリッドは、5 m × 5 m の 100 個の小グリッドに分割され、その名称は大グリッドの北西隅の 00 を起点に東へ 01・02…、南へ 10・20…として、南東隅が 99 となる。これを大グリッドの名称と組み合わせて 26U-13 のように表記し、遺構・遺物の位置は、この方眼網に基づいて記録した。遺構・遺物の標高は、東京湾平均海面 (T.P.) からの海拔高で記録した。

館ノ山遺跡は、南北に横切る道路によって東・西に分かれるが、その西側区域の南東隅が (4) の調査範囲となる。当初の対象面積は 944 m<sup>2</sup> で、上層について全面的確認調査を行ったところ、縄文時代・古墳時代・中世の遺構が多数存在することが明らかとなり、全域を本調査することになった。その後、事業者からの要望により、調査対象範囲は予定区域の西側も含めることになり、997 m<sup>2</sup> の上層本調査を実施した。上層の調査の結果、中世の台地整形工事のために関東ローム層が削平されていることがわかり、下層については、調査を実施しなかった。

(5) の調査範囲は、西側の区域の北東隅に当たる谷頭部の斜面で、対象面積は 656 m<sup>2</sup> である。まず上層について、谷頭である東側は面的に、そこから下る西側は間隔をあけてトレンチを入れ、合計 269 m<sup>2</sup> の確認調査を行った。その結果、上層は谷頭部に古墳時代の遺物が集中する様子は見られたものの遺構が検出されなかったため、確認調査で調査を終了した。下層は関東ローム層が存在しなかったため、調査を実施しなかった。

遺構番号は、001 から始まる 3 桁の数字で、その前に種別を表す略号を付けた。種別略号は、竪穴住居・方形竪穴状遺構が SI、掘立柱建物 SB、溝状遺構・道路状遺構が SD、欄列が SA、土坑・土坑墓・地下式坑・井戸などが SK、その他の種別が SX、小穴が P である。遺構を検出した館ノ山遺跡 (4) の調査では、平成 9 年度～平成 11 年度の調査で使用された番号に連続するかたちで付けることにし、SI-159～、SB-007～、SD-20～、SK-373～、SX-022～、P-324～、台地整形区画 H となる。館ノ山遺跡 (4) の時期ごとの遺構の種別と番号の詳細は、第 2 表に記載するとおりである。

遺物への注記は、市町村コード、遺跡コード、遺構番号、遺物台帳に記載された遺物番号の順で書き込んだ。グリッドをもとに取り上げた 遺物は、グリッド名を記載している。注記が不可能、または好ましくない遺物については、袋詰めして注記と同様のデータを記したラベルを付けた。

## 第 2 節 遺跡の位置と環境 (第 4～7 図)

### 1 遺跡の位置と地形

館ノ山遺跡は、千葉県四街道市物井字館ノ山に所在する。四街道市は、千葉県の北西部に位置し、北側が佐倉市、南側が千葉市と接する。物井地区は、四街道市の北東部にあたる台地上に広がり、東側を流れる鹿島川に面し、西側は、手繰川の上流部にあたる。一帯の台地は、鹿島川に注ぐ樹枝状の谷津によって浸食されて、複雑に入り組んだ地形となっている。標高は 30 m 前後である。

館ノ山遺跡は、物井地区の南東部に位置し、鹿島川本流が形成した幅 700 m 前後の低地から谷津を 200 m ほど入った台地上に立地する。台地は、谷津が東・南・西の三方をめぐり、北から南に向かって突き出す。谷津を挟んで東側が嶋越遺跡で、西側が小屋ノ内遺跡である。遺跡南側の低地は、千葉市との境界付近を水源とする小名木川の鹿島川への合流点である。

館ノ山遺跡が立地する台地は、北東の幅のせまい尾根で大きな台地とつながる島状となっており、館ノ山の地名の由来である中世城館が造られたのにふさわしい。尾根に近い北東側の標高が最も高く 32 m

ほどで、そこから東側の区域では南東方向に、西側の区域では南西方向に緩く傾斜している。その範囲は、東側の区域で長さ100m、幅30mほどであり、標高29m付近から下は傾斜が急になる。西側の区域では長さ100m、幅100mほどで、標高25m付近から下は傾斜が急になる。

現状の地形は、上記のようであるが、後で述べるように、本来の地形ではなく、中世における台地整形などで改変されていると考えられる。

## 2 周辺の遺跡

物井地区の事業地内の遺跡のこれまでの調査成果の概要は、以下のとおりである。北側の遺跡から示す<sup>1)</sup>。

**中久喜遺跡** 主な遺構は、縄文時代炉穴3基、弥生時代末～古墳時代前期堅穴住居5軒である。台地先端の調査で、西側に続く事業地外に、大集落の存在が想定されている。

**北ノ作遺跡** 主な遺構は、旧石器時代石器集中（Ⅴ層）1か所、縄文時代陥穴3基、弥生時代末～古墳時代前期堅穴住居32軒、古墳時代後期堅穴住居3軒、奈良・平安時代堅穴住居11軒、掘立柱建物4棟、中世城郭である。

**古屋城跡** 整理中で、主な遺構は、縄文時代土坑12基、古墳時代堅穴住居1軒、奈良・平安時代堅穴住居4軒、中世掘立柱建物1棟、腰曲輪1面、欄列1条、台地整形5か所である。

**郷遺跡** 主な遺構は、古墳時代後期堅穴住居5軒、奈良・平安時代堅穴住居17軒、奈良・平安時代～中～近世水場遺構1か所、中～近世掘立柱建物1棟、地下式坑2基である。

**稲荷塚遺跡** 主な遺構は、旧石器時代石器集中（Ⅴ層2、Ⅵ層4、Ⅶ層2）8か所、縄文時代炉穴9基、陥穴18基、縄文時代前期堅穴住居4軒、弥生時代後期堅穴住居1軒、弥生時代末～古墳時代前期堅穴住居1軒、古墳時代後期堅穴住居11軒、円墳2基、奈良・平安時代堅穴住居229軒、掘立柱建物53棟、欄列2条、中～近世土坑墓7基、塚3基、溝状遺構34条である。

**御山遺跡** 報告済みの主な遺構は、旧石器時代石器集中（Ⅲ層7、Ⅳ～Ⅴ層7、Ⅵ層1、Ⅶ層4、Ⅷ層1、Ⅷc層3、Ⅷ層上部2、Ⅷ層下部1）26か所、縄文時代陥穴4基、縄文時代晩期土坑墓1基、縄文時代晩期～弥生時代中期土器集中1か所、弥生時代後期堅穴住居3軒、円墳7基、方墳13基、古墳時代以降土坑墓5基、溝状遺構13条である。

その後の調査で、旧石器時代石器集中1か所、縄文時代陥穴3基、炉穴3基、縄文時代遺物包含層3か所、円墳1基、方墳2基、方形周溝1基、奈良・平安時代方形周溝16基、円形周溝1基、火葬墓2基、中世土坑41基、溝18条、台地整形区画1か所、近世寺院（金剛寺）跡、土坑墓14基、火葬墓1基、欄列2条、溝状遺構2条、陶磁器廃棄場1か所を検出した。

**清水遺跡** 報告済みの主な遺構は、旧石器時代石器集中（Ⅲ層1、Ⅳ層2、Ⅳ～Ⅴ層6、Ⅵ～Ⅷ層14、Ⅷc～Ⅷ層3）26か所、縄文時代陥穴11基、古墳（円墳・前方後円墳）17基、奈良・平安時代土坑墓1基である。

その後の調査で、前方後円墳1基、円墳2基、土坑墓3基を検出した。

**新久遺跡** 主な遺構は、旧石器時代石器集中（Ⅲ層2、Ⅳ～Ⅴ層1、Ⅵ層3、Ⅶ～Ⅷ層4、Ⅷc～Ⅷ層1）11か所、縄文時代陥穴13基、弥生時代後期堅穴住居18軒、古墳（円墳・前方後円墳）5基、方形周溝1基、土坑墓2基である。

**出口遺跡** 報告済みの主な遺構は、縄文時代陥穴3基、縄文時代早期堅穴住居1軒、古墳（円墳・前方後



円墳) 13基、奈良・平安時代方形周溝3基、土坑墓4基、中世カワラケ埋納土坑1基である。

その後の調査で、縄文時代陥穴1基、中～近世溝1条を検出した。旧石器時代石器集中8か所は整理中である。

**高堀遺跡** 検出したのは、旧石器時代石器集中(Ⅶ層～Ⅸ層)2か所、縄文時代陥穴1基、竪穴状遺構1基である。

**出口・鐘塚遺跡** 報告済みの主な遺構は、旧石器時代石器集中(Ⅲ層～Ⅳ層上部3、Ⅳ層下部1、Ⅵ層2、Ⅶ層3、Ⅸ層14)23か所、縄文時代陥穴3基、円墳1基、奈良・平安時代方形周溝6基である。

その後の調査で、旧石器時代石器集中3か所、縄文時代陥穴1基、中世道路状遺構1条、溝状遺構1条を検出した。

**樺山・呼戸遺跡** 検出した主な遺構は、旧石器時代石器集中18か所、縄文時代が穴群23か所、縄文時代土坑20基、古墳時代後期竪穴住居1軒、方墳2基、古墳時代土坑1基、溝状遺構21条、井戸状遺構3基、土坑134基で、整理中である。

**小屋ノ内遺跡** 主な遺構は、旧石器時代石器集中(Ⅲ層下部～Ⅴ層15、Ⅶ層～Ⅸ層上部6、Ⅸ層14)35か所、縄文時代が穴22基、陥穴16基、縄文時代中期竪穴住居1軒、縄文時代遺物集中(早期2、後期後半1)3地点、弥生時代後期壺棺墓1基、弥生時代後期～古墳時代前期竪穴住居35軒、古墳時代中期竪穴住居7、小鍛冶工房1軒、古墳時代後期竪穴住居11軒、円墳6基、方墳1基、奈良・平安時代竪穴住居273軒、掘立柱建物136棟、土坑墓4基、欄列1条、中～近世土坑墓10基、地下式坑3基、井戸状遺構7基、台地整形区画5か所、溝状・道路状遺構67条、土坑423基、小穴855基である。台地整形区画は、近世主体である

**嶋越遺跡** 整理中で、縄文時代早期～晩期遺物包含層3か所、縄文時代後期竪穴住居1軒、弥生時代後期竪穴住居1軒、奈良・平安時代竪穴住居31軒、中世地下式坑、土坑、井戸状遺構、台地整形区画などを検出した。また、事業地外で(財)印旛都市文化財センターが行った調査では、縄文時代早期～晩期の遺物包含層と古墳時代後期の竪穴住居1軒が検出されている<sup>2)</sup>。

事業地外では、館ノ山遺跡の北側に馬場№1遺跡が位置する。これまで、2回の発掘調査が行われている<sup>3)</sup>。主な成果は、弥生時代後期方形周溝墓13基、古墳時代後期竪穴住居1軒、奈良・平安時代竪穴住居44軒、掘立柱建物4棟、溝状遺構2条、道路5条、中世溝1条である。また、館ノ山遺跡と谷津を挟んだ南側の台地上には入ノ台第2遺跡があり、発掘調査が行われている<sup>4)</sup>。調査地点は、台地の南側で、館ノ山遺跡と向かい合う側ではないが、古墳時代後期竪穴住居80軒、奈良時代竪穴住居7軒、平安時代竪穴住居15軒など弥生時代後期から平安時代までの竪穴住居が重なり合っている<sup>5)</sup>。

館ノ山遺跡の報告分の調査成果は、縄文時代後期竪穴住居3軒、縄文時代陥穴3基、古墳時代前期竪穴住居2軒、古墳時代中～後期竪穴住居71軒(うち後期59軒)、奈良・平安時代竪穴住居9軒、大形円形土坑1基、中～近世館跡、台地整形区画4か所、掘立柱建物4棟、空堀2条、土塁1条、溝状遺構14条、地下式坑16基、井戸状遺構4基、土坑(墓)・小穴・焼土遺構417基である。

本書で報告する館ノ山遺跡(4)の調査成果は、古墳時代後期竪穴住居1軒、平安時代竪穴住居1軒、中世台地整形区画3か所、溝状遺構6条、方形竪穴状遺構2基、掘立柱建物9棟、地下式坑4基、井戸状遺構3基、欄列1条、土坑41基、その他・小穴などが103基である。古墳時代後期の竪穴住居は、前回調査で北半分を調査している残りの部分にあたる。館ノ山遺跡(5)では遺構は確認されなかった。



第5図 館ノ山道跡周辺の地形





第7図 館ノ山道跡中一近世の遺構全体図

館ノ山遺跡は、中世の館跡として注目されるが、それ以前の古墳時代後期にも相当規模の集落であった。調査面積からすると、物井地区の遺跡の中で、当該時期の堅穴住居が極めて集中している。こうした堅穴住居が重なり合う様相は、南側の入ノ台第2遺跡でも見られる。それに対して、東側部分が館ノ山遺跡に面する小屋ノ内遺跡では、古墳時代後期の堅穴住居 11 軒のうち、10 軒が館ノ山遺跡の下から続く谷津に面して、散在している。また館ノ山遺跡の北に位置する稲荷塚遺跡でも古墳時代後期の堅穴住居が 11 軒検出されているが、やはり散在している。近くに堅穴住居を建てて集落を営むのに適した平地が十分にありながら、限られた範囲に堅穴住居を重ねるように造っていることは、特別な事情があった可能性がある。

奈良・平安時代になると、堅穴住居は大幅に減少している。北側の馬場№1 遺跡の方へ集落の中心が移動している可能性がある。また堅穴住居は重なり合わず、散在している。

中世になると、館ノ山という小字名のもとになったと思われる館が築かれた。出土した陶磁器・土器については、「主な時期は 15 世紀前半～16 世紀初頭であり、特に 15 世紀後半が多い。」と既刊の報告書に記載され (289 頁)、館の時期も同様と考えてよさそう。

物井地区遺跡群のこれまでの調査成果をみると、館ノ山遺跡をはじめとして東側に当たる北ノ作遺跡・古屋城跡・郷遺跡・稲荷塚遺跡・小屋ノ内遺跡・鶴越遺跡では、中～近世の遺構が多数検出されている。これに対して、西側ではわずかで、出口遺跡のカワラケ埋納土坑も遺跡の東側にある。このことから、中～近世においては、物井地区では東側の台地上に、集落などが集中していたと推測される。因みに、明治 20 年作成の陸軍迅速図でも、人家は東側にしか見えない。物井地区の東側の遺跡については、これまでの報告書の刊行で、鶴越遺跡を除いて、その相当部分の状況が報告されたため、現在では、総合的に検討することが可能になってきている。

館ノ山遺跡の中心的な時期である古墳時代後期中世の遺跡については、先の報告書で詳しく触れているところであり (8～11 頁、第 6 図)、参照されたい。その周辺遺跡の分布図を、第 1 図に遺跡を若干補足した上で再掲する。第 1 図の○が遺跡群・古墳群、●が古墳時代後期の集落遺跡、■が戦国前期の城館跡 (本佐倉長勝寺脇館跡は後期) である。各遺跡の名称は、第 1 表のとおりである。

補足した遺跡には、古墳時代後期の相当規模の集落跡として、館ノ山遺跡から南へ鹿島川を遡った佐倉市岩富の岩富明代台西遺跡 (14)、岩富漆谷津遺跡 (15) があり、当該時期の堅穴住居が、それぞれ 7 軒と 59 軒検出されている。また、北の高崎川に面した佐倉市高岡 (現在白銀) の高岡遺跡群 (19) では、高岡大福寺遺跡で 32 軒、高岡大山遺跡で 95 軒の当該時期の堅穴住居が検出されている。四街道市成山の権現堂遺跡 (16) でも、当該時期の堅穴住居が 18 軒検出されている。印西市平賀の旧印磨沼に南面する台地上にあって互いに近接した駒込遺跡 (22)・油作第 1 遺跡 (24)・油作第 2 遺跡 (23) では、当該時期の堅穴住居が、それぞれ 59 軒、52 軒、94 軒検出されている。また、千葉市堀之内城跡 (78) では、城跡の北側に位置する台地で中世居住域が検出されている<sup>5)</sup>。

#### 注

1 物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書の既刊分 13 冊は以下のとおりである。

1994 「四街道市御山遺跡 (1) - 物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書 1 -」

1999 「四街道市出口・鎌塚遺跡 - 物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書 II -」

2005 「四街道市小屋ノ内遺跡 (1) 旧石器時代編 - 物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書 III -」

2006 「四街道市小屋ノ内遺跡 (2) 縄文～中～近世編 - 物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書 IV -」

2007 「四街道市小屋ノ内遺跡 (3) - 物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書 V -」

- 2008 「四街道市郷道跡・中久喜道跡-物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書VI-」
- 2009 「四街道市稲荷塚道跡-物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書VII-」
- 2009 「四街道市清水道跡-物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書VIII-」
- 2011 「四街道市館ノ山道跡-物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書IX-」
- 2011 「四街道市新久道跡-物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書X-」
- 2011 「四街道市清水道跡・新久道跡 旧石器時代編-物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書XI-」
- 2012 「四街道市出口道跡-物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書XII-」
- 2013 「四街道市北ノ作道跡-物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書XIII-」
- 2 2011 「千葉県四街道市鶴越道跡(第2地点)-物井2号線埋蔵文化財調査委託-」(財)印旛郡市文化財センター
- 3 2007 「千葉県四街道市馬場No.1道跡-物井の里宅地造成地内埋蔵文化財調査-」(財)印旛郡市文化財センター
- 2012 「印旛郡市文化財センター年報27-平成22年度-」(財)印旛郡市文化財センター
- 4 1990 「千葉県四街道市入ノ台第2道跡発掘調査報告書」四街道市教育委員会
- 5 2012 「千葉県佐倉市岩富明代台西道跡(第4次・第5次)-岩富6-263号線埋蔵文化財整理業務委託-」(財)印旛郡市文化財センター
- 1983 「岩富鎌谷津・太田宿」佐倉市教育委員会
- 1993 「千葉県佐倉市高岡道跡群I~IV 佐倉市高岡地区宅地造成予定地内埋蔵文化財調査報告書(I)~(IV)」(財)印旛郡市文化財センター
- 2004 「千葉県四街道市権現堂道跡-四街道市成台中土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査(II)-」(財)印旛郡市文化財センター
- 1986 「平賀」平賀道跡群発掘調査会
- 1991 「千葉県印旛郡印旛村油作第1道跡発掘調査報告書-印旛村立平賀小学校建設予定地内埋蔵文化財調査-」(財)印旛郡市文化財センター
- 1995 「千葉県印旛郡印旛村油作1-II道跡発掘調査報告書-印旛村平賀小学校運動場拡張工事に伴う埋蔵文化財調査-」(財)印旛郡市文化財センター
- 2003 「千葉県堀之内城跡・免谷津道跡・志保多道跡」(財)千葉県教育振興財団

## 第2章 遺構と遺物

### 第1節 古墳時代

SI-159 (第4表、第8図、図版3・11)

調査区北端部、26U-04 グリッド、館ノ山遺跡で検出された古墳時代集落の南東端に位置する竪穴住居である。前回の調査で検出されたSI-144の南西部分になる。南東隅から北西隅にSD-020が重複している。また、南西隅をSD-021により削平されている。

規模は推定で、長軸4.3m、短軸4.0m、面積は約16.6㎡である。主軸方向はN-6°-Wである。壁溝は遺存範囲で検出された。柱穴は検出されなかった。カマドは北壁の中央部分に構築されていたことが前回の調査で確認されている。カマドの前面に当たる位置から焼土が検出された。

遺物はカマド付近と中央で出土した。床面直上または覆土中からの検出である。土師器11点と土製支脚1点を図示した。1～5は杯である。1は平らに近い丸底の底部から口縁部に向かい内湾しながら外方向に立ち上がる形状を呈する。器壁は厚く重量感のある杯である。口縁部ヨコナデの後、外面底部から口縁部まで横方向のヘラケズリを施し、内面は丁寧なナデを施す。2は口縁部から体部の一部のみの遺存である。口縁部ヨコナデの後、横方向のヘラケズリ、内面には粗いヘラミガキが施されている。3、4はほぼ同形で体部と口縁部との境に突出する稜を有する。口縁部ヨコナデの後、体部にヘラケズリを施している。5は突出する稜を有し口縁部は大きく外反する。口縁部ヨコナデの後、内面は粗いヘラミガキ、外面は横方向のヘラケズリを施している。6～7は甕である。6は小型の甕で口縁部は外反する。胴部中位までの遺存であるが、上位付近まで二次的な焼成を受けており、器面の荒れが著しい。7は口縁部が緩やかに外反する。胴部中位に最大径を有し、胴部中位以下は遺存しないものやや長胴になる形態と思われる。外面は横方向のヘラケズリの後、縦方向の粗いヘラミガキが施されている。二次的な焼成により器面の荒れが著しい。8は甕で、口縁部と胴部上位のごく一部の遺存である。口縁部と胴部の境にヨコナデによる稜が確認できる。胴部には縦方向のヘラケズリが施される。9～11は甕の底部のみの遺存である。12は土製支脚で、カマド前の焼土付近からの出土である。出土土器から6世紀後半の所産である。

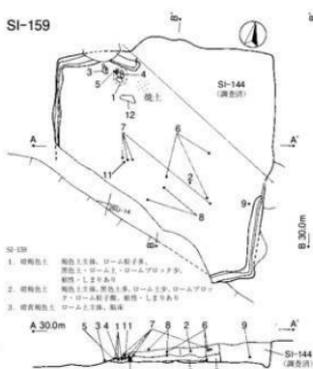
### 第2節 平安時代

SI-160 (第4表、第8図、図版3・11)

調査区南端、26U-52 グリッドに位置する竪穴住居である。一辺2.8mの正方形を呈する。南北方向にSD-026が走っており、南壁と床面の約半分程度が削平されている。推定面積7.3㎡である。主軸方向はほぼ真北を指す。壁溝は壁が遺存する部分で検出され、全周していたと考えられる。硬化面は確認されなかった。確認面からの深さは約40cmを測る。柱穴は検出されない。カマドは北壁の中央に構築され、灰黄褐色の山砂で袖部が形成されている。奥壁部は緩やかに立ち上がり、火床部は径20cmの円形を呈する。カマド内から須恵器の杯などが出土した。

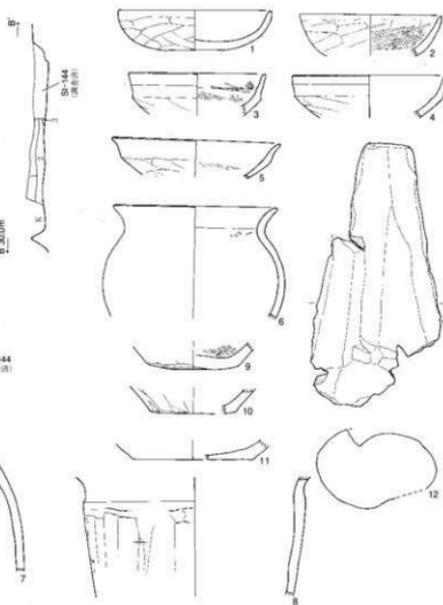
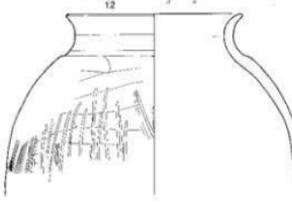
図示した遺物はカマド奥の覆土中から出土した。1～3は須恵器の杯である。4は須恵器甕で、口縁部が短く垂直に立ち上がる。口縁直下から胴部にかけて縦方向のタキキが施されているが、タキキ目の痕跡は不明瞭である。出土土器はいずれも9世紀中葉の所産である。

SI-159

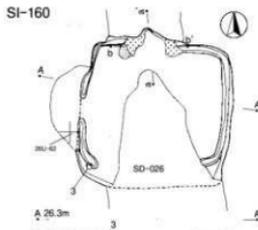


SI-159

1. 硬質粘土 褐色土主層、ローム層少量、厚粘土・ローム土・ロームアブツク少、縦溝・しまりあり
2. 硬質粘土 褐色土主層、褐色土層、ローム土主層、ロームアブツク・ローム層少量、縦溝・しまりあり
3. 硬質粘土 ローム土主層、縦溝



SI-160

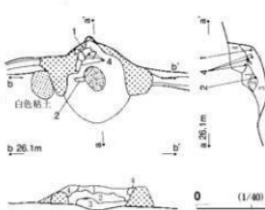


SI-160

1. 硬質粘土 褐色土主層、白色粘土層・黄褐色砂質土・ローム土・ローム層少量、縦溝・しまりあり
2. 硬質粘土 褐色土主層、白色粘土・粘土アブツク・黄褐色砂質土アブツク多、縦溝・しまりあり
3. 硬質粘土 褐色土主層、白色粘土層少量、縦溝・しまりあり
4. 硬質粘土 白色粘土主層、褐色土・白色粘土アブツク・粘土層少量・黄褐色砂質土主層、縦溝・しまりあり
5. 硬質粘土 ローム土主層、白色粘土層少量、褐色土・黄褐色砂質土少、縦溝・しまりあり
6. 硬質粘土 ローム土主層、褐色土主層、白色粘土層少量、縦溝・しまりあり
7. 硬質粘土 ローム土主層、白色粘土層少量、ロームアブツク・黄褐色砂質土少、縦溝・しまりあり

白色粘土  
アブツク

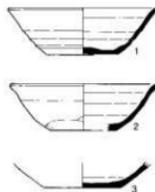
0 (1/80) 4m



SI-160 水ヤド

1. 硬質粘土 山崎・褐色土主層少量、縦溝・しまりあり
2. 硬質粘土 褐色土主層・粘土アブツク主層、縦溝・しまりあり
3. 硬質粘土 褐色土主層、粘土層少量、褐色土・山崎少量、縦溝・しまりあり
4. 硬質粘土 褐色土主層、山崎土・粘土アブツク少量、縦溝・しまりあり

0 (1/80) 1m



0 (1/4) 10cm

第8図 SI-159・160

### 第3節 中世

#### 1 台地整形区画・溝状遺構

##### 台地整形区画H・I・J（第9図、図版3・4）

本遺跡では、地山を削り、溝状遺構などで囲んだ3か所の台地整形区画が確認された。調査区（4）の北側を囲むように位置している溝状遺構SD-020の内側をH台地整形区画、調査区南側の西をI台地整形区画、東をJ台地整形区画とした。I台地整形区画はおおよそ1.2m程度、J台地整形区画は50cm～60cm程度掘り込んでいる。台地整形区画内からは、多数の土坑やピット群、掘立柱建物などが検出されている。I台地整形区画とJ台地整形区画との間は谷に向かって開放され、谷津からの上がり口にあたる。台地整形区画内の居住空間の入り口になると考えられ、階段状遺構SD-026、それに伴うと考えられる横列SA-001などが検出された。I・Jの台地整形区画内からもそれぞれに土坑や小穴が検出されており、台地整形区画内の遺構は切り合い関係から、掘立柱建物群が営まれた後に、土坑や小穴群を含む多くの遺構が配置されたものと思われる。

##### SD-020（第10図、図版4）

調査区北側に位置する緩やかな弧状の溝状遺構である。長さ約45.5m、幅1.0m～2.4m、確認面からの深さは6cm～32cmを測る。堆積土はローム粒子を非常に多く含む褐色土が主体である。平成10年度調査で一部を検出しSD-012と呼称され、近世陶磁器などを出土しているが、調査区端部で検出したために、その性格は明瞭にできなかった。今回の調査でH台地整形区画の北側を区画している溝状遺構であることが明らかとなった。前に調査した東側調査区のSD-001とつながる可能性がある。

##### SD-021・023（第11図、図版4）

調査区北側、SD-020の南側に沿うように位置する。方形の土坑が連なっている形状で、SD-021とSD-023は一連の遺構と思われる。長さは約37.5m、幅は1.5m～2.4mを測る。深さは確認面から18cm～44cmである。堆積土はロームブロック・ローム粒子を多く含む暗褐色土または黄褐色土が主体である。

##### SD-022（第11図、図版4）

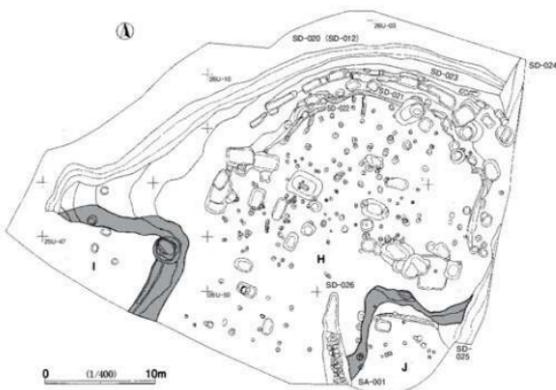
SD-021・023の南側に同様な弧を描く。北東隅は攪乱により確認できないが、調査区東端で再び南北にのびる溝として検出される。長さは延べで43.0mである。幅は0.6m～1.3m、確認面からの深さは10cm～15cmである。堆積土はロームブロック・ローム粒子を少量含む黒色土が主体である。

##### SD-024（第12図、図版4）

調査区北東端のH台地整形区画内で検出され、調査区外にのびている。幅は0.9m、確認できた長さは4.0m、確認面からの深さは60cm～130cmである。南で検出されたSD-025と一連の遺構であろう。堆積土はローム粒子を含む褐色土が主体である。

##### SD-025（第13図、図版4・11）

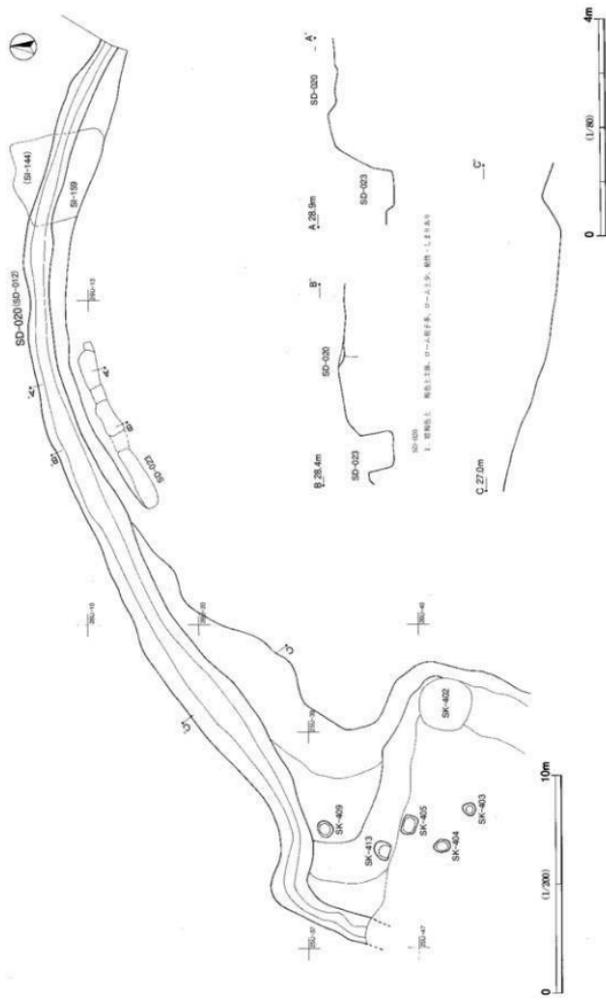
調査区南東端に位置する。ほとんどが調査区外となっているがJ台地整形区画を切るように構築され、掘立柱建物や土坑群のある平坦地の東側を区画する溝状遺構である。北側のSD-024へ続くと思われる。出土遺物は2点である。1は古瀬戸樽式花瓶で底部が遺存している。底部には糸切り痕が見られる。外面は淡緑色の灰釉が施され、胎土は灰白色である。藤澤編年古瀬戸後期I型式の14世紀の所産である。2は常滑の片口鉢で、口縁部～底部までのごく一部が遺存する。内面には使用による摩耗が確認できる。胎土は赤褐色で小礫を含む。中野編年8型式で14世紀のものと思われる。



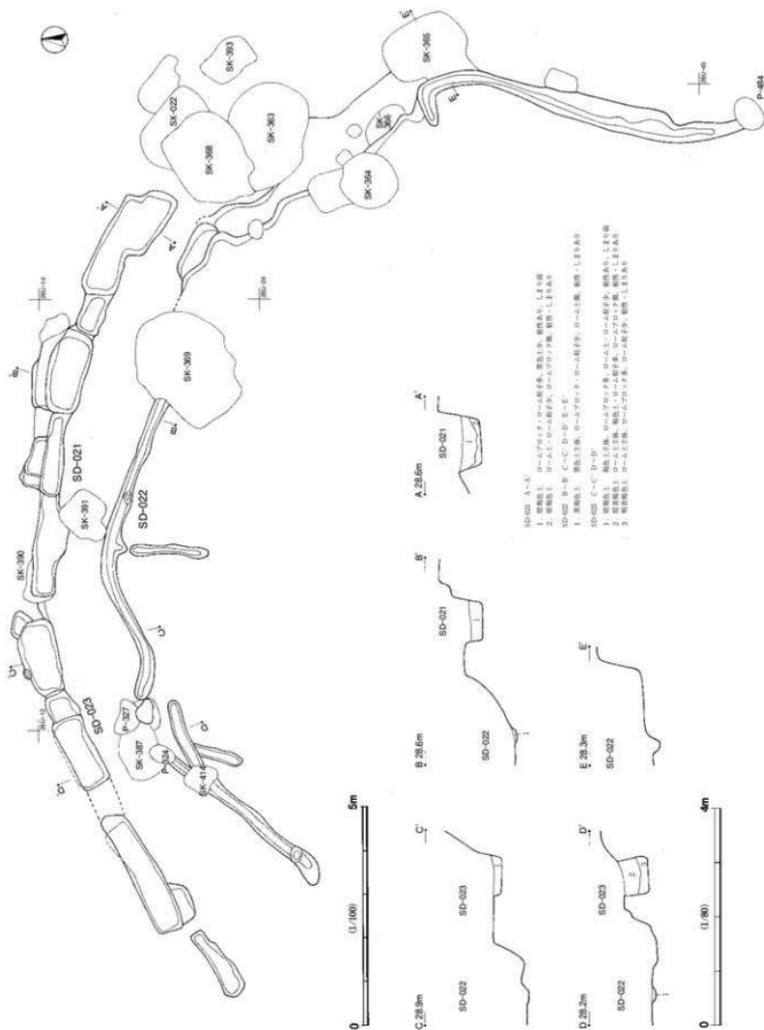
第9图 台地整形区画

第3表 土坑等計測表

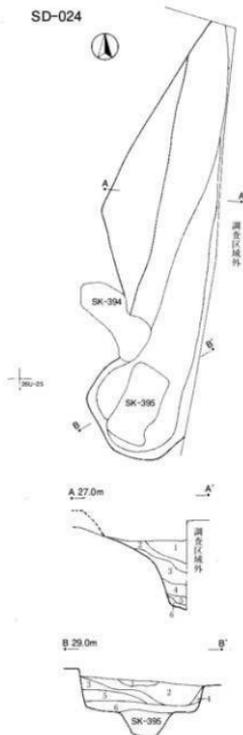
検回 番号	遺構 番号	種類	位置	規模 (m)			検回 番号	遺構 番号	種類	位置	規模 (m)		
				長軸 (径)	短軸 (径)	深さ					長軸 (径)	短軸 (径)	深さ
第13国	SI-158	方形竪穴状遺構	26U-44	3.20	2.60	0.10	第21国	SK-388	土坑	26U-12	0.85	0.70	0.18
第18国	SK-363	井戸状遺構	26U-24	1.20	1.00	4.40+	第21国	SK-389	土坑	26U-12	1.24	0.90	0.20
第18国	SK-364	井戸状遺構	26U-24	1.36	1.00	2.50+	第21国	SK-390	土坑	26U-02	-	-	0.58
第6国	SK-365	土坑	26U-25	1.90	-	0.92	第21国	SK-391	土坑	26U-12	1.26	1.00	0.42
第6国	SK-366	土坑	26U-24	1.10	-	0.31	第6国	SK-393	土坑	26U-15	1.18	0.72	0.28
第20国	SK-367	土坑	26U-23	2.02	0.84	0.31	第6国	SK-394	土坑	26U-15	-	0.64	0.48
第18国	SK-368	土坑	26U-14	1.75	1.62	1.22	第6国	SK-395	土坑	26U-25	1.40	0.69	0.45
第18国	SK-369	井戸状遺構	26U-13	1.10	1.10	1.54+	第20国	SK-396	土坑	26U-22	1.76	1.12	0.48
第6国	SK-370	土坑	26U-13	1.08	1.06	0.36	第21国	SK-397	土坑	26U-32	1.10	1.06	0.36
第20国	SK-371	土坑	26U-32	2.30	1.60	0.68	第20国	SK-398	土坑	26U-44	0.92	-	0.14
第20国	SK-372	土坑	26U-42	1.25	1.20	0.26	第20国	SK-399	土坑	26U-44	-	1.34	0.30
第13国	SK-373	方形竪穴状遺構	26U-31	2.74	2.16	0.76	第20国	SK-400	土坑	26U-43	1.10	-	0.06
第20国	SK-374	土坑	26U-41	1.70	1.10	0.82	第22国	SK-401	土坑	26U-53	1.26	1.02	0.40
第20国	SK-375A	土坑	26U-43	-	2.30	0.56	第19国	SK-402	地下式坑	25U-49	2.48	2.36	0.88
第20国	SK-375B	土坑	26U-43	-	-	0.44	第22国	SK-403	土坑	25U-48	0.58	0.56	0.16
第20国	SK-376	土坑	26U-43	2.40	2.20	0.54	第22国	SK-404	土坑	25U-47	0.68	0.62	0.12
第20国	SK-377	土坑	26U-44	1.62	1.18	0.72	第22国	SK-405	土坑	25U-38	0.84	0.60	0.52
第21国	SK-380	土坑	26U-51	1.56	0.96	0.28	第19国	SK-406	地下式坑	26U-21	2.54	2.42	1.14
第21国	SK-381	土坑	26U-40	1.78	0.98	0.20	第19国	SK-407	地下式坑	26U-20	2.65	2.54	2.42
第21国	SK-382	土坑	26U-40	1.64	1.14	0.30	第22国	SK-408	土坑	26U-20	3.82	2.04	0.26
第21国	SK-383	土坑	26U-30	1.92	1.18	0.50	第22国	SK-409	土坑	25U-38	0.70	0.66	0.10
第19国	SK-384	地下式坑	26U-31	3.38	2.50	1.14	第22国	SK-410	土坑	26U-31	1.12	1.05	0.38
第21国	SK-385	土坑	26U-31	2.06	0.90	0.14	第22国	SK-411	土坑	26U-31	1.04	0.88	0.08
第21国	SK-386	土坑	26U-11	0.70	-	0.26	第6国	SK-413	土坑	25U-37	-	0.78	0.38
第21国	SK-387	土坑	26U-11	-	1.10	0.56	第21国	SK-414	土坑	26U-11	0.66	0.62	0.20



第10图 SD-020



第11圖 SD-021・023、SD-022

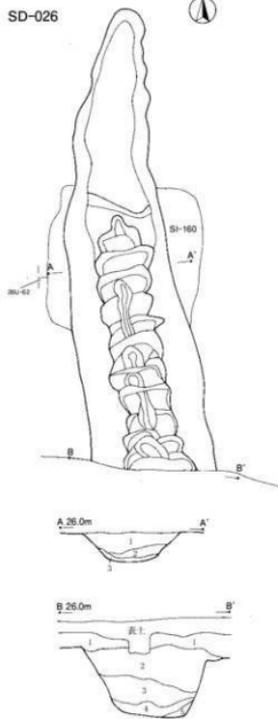


SD-024 A-A'

1. 埋藏層位: ローム土層、ローム質子、ローム質ロツク多、褐色土少、粘性・しまりあり
2. 埋藏層位: 褐色土層、褐色土・ローム層多、ローム層子多、ローム質ロツク多、粘性・しまりあり
3. 埋藏層位: 褐色土層、ローム土・ローム層多、ローム質ロツク多、粘性あり、しまりあり
4. 埋藏層位: 褐色土層、ローム土・ローム質ロツク多、ローム層子多、粘性・しまりあり
5. 埋藏層位: ローム土層、ローム層子・褐色土層、ローム質ロツク多、粘性・しまりあり
6. 埋藏層位: 褐色土層、褐色土層、ローム土・ローム層子・ローム質ロツク多、粘性・しまりあり

SD-024 B-B'

1. 埋藏層位: ローム土層、ローム質ロツク・褐色土、褐色土少、粘性・しまりあり
2. 埋藏層位: 褐色土層、褐色土・ローム層多、ローム質ロツク多、粘性・しまりあり
3. 埋藏層位: 褐色土層、ローム質ロツク多、ローム土・ローム層多、粘性・しまりあり
4. 埋藏層位: ローム層子層、ローム土層、粘性あり、しまりあり
5. 埋藏層位: 褐色土層、ローム土層、ローム層子・ローム質ロツク多、粘性・しまりあり
6. 埋藏層位: ローム土層、ローム質ロツク・ローム層多、褐色土・褐色土少、粘性・しまりあり

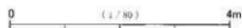


SD-026 A-A'

1. 埋藏層位: ローム土層、褐色土・ローム質ロツク多、白色粘土層子多、表面は砂質土層子層、粘性・しまりあり
2. 埋藏層位: 褐色土層、ローム土・白色粘土層子多、褐色土・白色粘土層・褐色砂質土・ローム質ロツク多、粘性・しまりあり
3. 埋藏層位: 褐色土層、白色粘土層・白色粘土層子多、褐色土・ローム土・ローム層子・表面は砂質土層子多、粘性あり、しまりあり

SD-026 B-B'

1. 埋藏層位: 褐色土層、表面は砂質土層
2. 埋藏層位: ローム質ロツク・ローム土・ローム層多、粘性・しまりあり
3. 埋藏層位: 褐色土層、ローム土・ローム層多、粘性・しまりあり
4. 埋藏層位: 褐色土層、ローム質ロツク多、白色粘土層・褐色砂質土層子多、白色粘土層子・表面は砂質土層子多、粘性・しまりあり
5. 埋藏層位: 褐色土層、白色粘土層・白色粘土層子多、褐色土層子多、粘性・しまりあり



第12図 SD-024・026

#### SD-026 (第12図、図版5)

調査区南側、J台地整形の西側に位置する階段状の遺構である。台地下から台地整形区画内の居住空間に上がる階段状の通路と考えられる。11段の階段の後、台地上に上がった段階で、1.7m程度の長さの僅かな登り坂状となる。幅は0.5m～1.1mを測る。堆積土はロームブロック・ローム粒子を含む褐色土が主体である。

#### 2 柵列

##### SA-001 (第13図)

調査区南端、26U-63グリッド付近に位置する。南北に5基の小穴が配列され、北からP-486、P-487、P-488、P-495、P-496である。確認面からの深さは5基とも10cmである。間隔は南の2基が30cm、北の2基が20cmで、中央の1基との間隔は広く80cm～100cmである。階段状遺構SD-026に伴って構築されたものと考えられる。

#### 3 方形竪穴状遺構 (第3表)

##### SI-158 (第13図、図版5)

調査区南東部、26U-44グリッドに位置する。SK-376・SK-377・SK-399に切られている。平面形は南北に長い方形で、規模は長軸3.20m、短軸2.60m、確認面からの深さは10cmで、長軸の方位はN-8°-Eである。床面は南側が低くなる傾斜で硬化面などは確認できない。南壁付近に焼土が検出されたが、カマドなどの施設ではないと判断した。遺構中央部でP-452とP-453を検出した。本遺構に伴うものかどうか不明であるが、P-453は深さ40cm、径は35cmを測る。出土遺物はない。

##### SK-373 (第13図、図版9)

調査区中央、26U-31グリッドに位置する。東西方向に長い長方形を呈している。主軸方向はN-66°-Wである。長軸2.74m、短軸2.16mを測る。床面は平坦ではなく、中央には東西に長い楕円形のビットが検出された。床面からの深さは10cmである。このビットを挟むように、一対の小ビットが確認された。径は20cm、深さは4cm～6cmで浅い。出土遺物はない。

#### 4 掘立柱建物

##### SB-007 (第14図、図版5)

調査区東側、26U-34グリッドに位置する。桁行3間×梁行1間の建物と思われる。規模は桁行5.0m×梁行2.0mで、桁行方位はN-19°-Eである。SD-022を切るように東側の柱穴が構築されているものの、詳細は不明瞭である。東側の4か所目の柱穴は確認できなかった。柱穴の掘りかたは円形および楕円形で、径は30cm～60cm、確認面からの深さは10cm～50cmである。

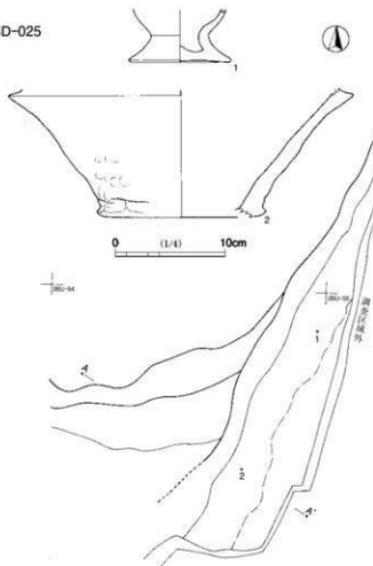
##### SB-008 (第14図、図版5)

調査区南端、26U-50グリッドに位置する。桁行3間×梁行2間の建物と思われる。規模は桁行6.9m×梁行4.0mで、桁行方位はN-70°-Wである。西梁行中間には柱穴がみられない。焼土が検出された(SX-027)ことから、西側が土間であった可能性が考えられる。柱穴の掘りかたは円形で、径は30cm～60cmほどである。確認面からの深さは18cm～60cmを測る。

##### SB-009 (第15図、図版5)

調査区中央、26U-23グリッドに位置する。桁行4間×梁行2間の建物と思われる。規模は桁行6.8m～7.4m×梁行4.2m～4.5mで、桁行方位はN-72°-Wである。SB-011と重複している。小ビットが多

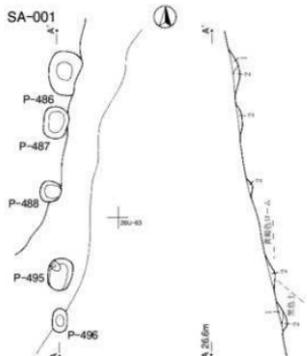
SD-025



SD-025

1. 埋藏物土 砂土・ローム質多、ローム質少、白土層(1層)多、粘性・しまり多
2. 埋藏物土 砂土・ローム質多、ローム質少、白土層(1層)多、粘性・しまり多
3. 埋藏物土 2層(埋藏物)・粘性・しまり多
4. 埋藏物土 ローム土・黒褐色砂質土・白土層(1層)多、粘性・しまり多
5. 埋藏物土 埋藏物土層、ローム土・ローム質多、ローム質少・白土層(1層)多、粘性・しまり多
6. 埋藏物土 埋藏物土層、白土層(1層)多、粘性・しまり多
7. 埋藏物土 ローム土・ローム質多、白土層(1層)多、粘性・しまり多
8. 埋藏物土 ローム土・ローム質多、埋藏物土・ローム質多、黒褐色砂質土・ローム質多、粘性・しまり多
9. 埋藏物土 黒褐色土層、埋藏物土・ローム土多、ローム質多、白土層(1層)多、粘性・しまり多
10. 埋藏物土 埋藏物土層、粘性土

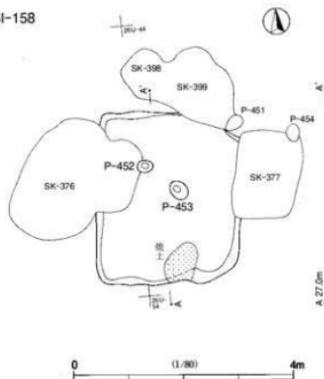
SA-001



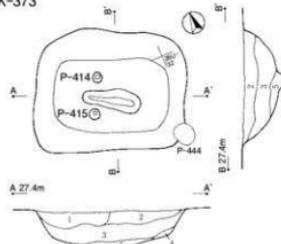
SA-001

1. 埋藏物土 埋藏物土層、埋藏物土・ローム土・ローム質多、粘性・しまり多
2. 埋藏物土 埋藏物土層、埋藏物土・ローム質多、ローム土多、粘性・しまり多

SI-158



SK-373

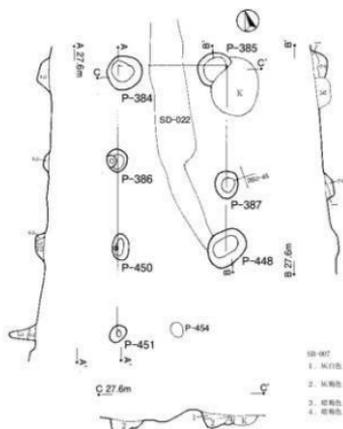


SK-373

1. 埋藏物土 埋藏物土層、埋藏物土・ローム土・ローム質多、ローム質少・白土層(1層)多、粘性・しまり多
2. 埋藏物土 埋藏物土層、ローム土・ローム質多、ローム質少・白土層(1層)多、粘性・しまり多
3. 埋藏物土 ローム土・ローム質多、埋藏物土・ローム質多、白土層(1層)多・黒褐色砂質土・ローム質多、粘性・しまり多
4. 埋藏物土 埋藏物土層、ローム土・ローム質多、ローム質少・白土層(1層)多、粘性・しまり多
5. 埋藏物土 ローム土・ローム質多、埋藏物土・黒褐色砂質土・ローム質多、白土層(1層)多・ローム質多、粘性・しまり多

第13図 SD-025、SA-001、SI-158、SK-373

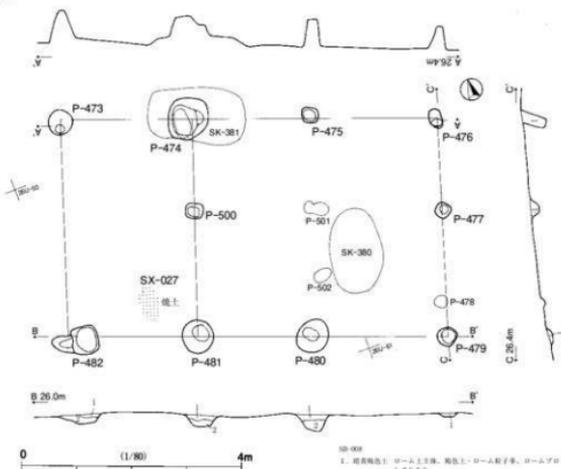
SB-007



SB-007

1. 灰白土 白土層にアゾウクエ、焼土、土層、ロームアゾウク、灰白土層アゾウク、焼土層、  
土層あり
2. 灰白土 焼土、白土層、白土層に灰土、ロームアゾウク、白土層にアゾウク、灰  
白土層に土層、焼土層あり
3. 灰白土 焼土、白土層に灰土、灰白土層に灰土、焼土、土層あり
4. 灰白土 焼土、白土層にアゾウク、白土層に灰土、灰白土層にアゾウク、  
土層、焼土、土層あり

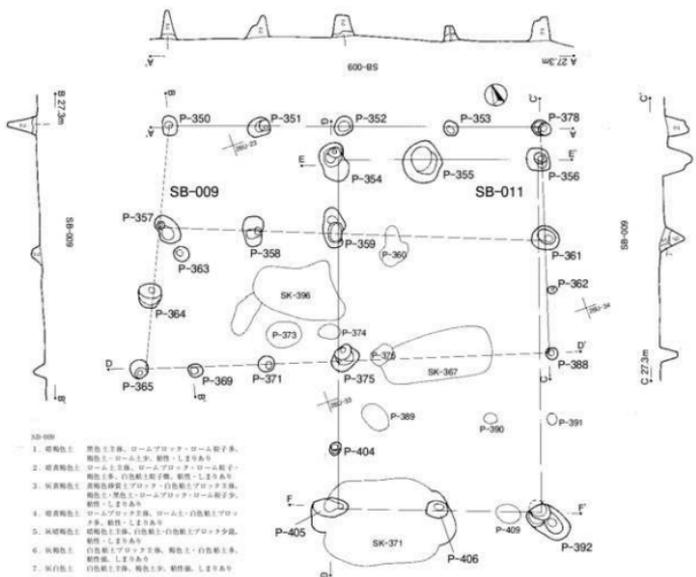
SB-008



SB-008

1. 硬灰白土 ローム土層、焼土、ローム灰土、ロームアゾウク、白土層に灰土、焼土、  
土層あり
2. 灰白土 白土層、焼土、白土層にアゾウク、ロームに灰土、灰白土層にアゾウク、ロ  
ーム、ロームアゾウク、ローム灰土、焼土、土層あり

第14図 SB-007・008



SB-009

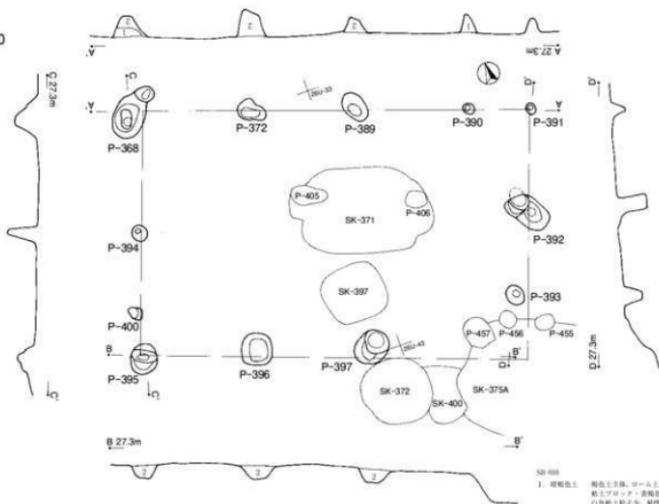
1. 埋藏物土 黒色土主層、ローム質アロップ・ローム散子多、焼物土・ローム土多、焼物・しまりあり
2. 埋藏物土 ローム土主層、ローム質アロップ・ローム散子多、焼物土多、白色焼土散子層、焼物・しまりあり
3. 埋藏物土 黒褐色砂質土アロップ・白色焼土アロップ多、焼物土・ローム土・ローム質アロップ・ローム散子多、焼物・しまりあり
4. 埋藏物土 ローム質アロップ多、ローム土・白色焼土アロップ多、焼物・しまりあり
5. 埋藏物土 褐色土主層、白色焼土・白色焼土アロップ少、焼物・しまりあり
6. 埋藏物土 白色焼土アロップ主層、焼物土・白色焼土多、焼物散、しまりあり
7. 灰白土上 白色焼土主層、焼物土少、焼物散、しまりあり

SB-011

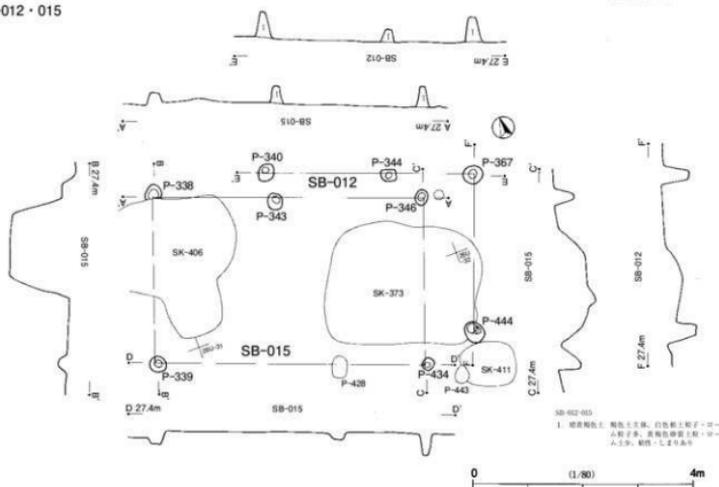
1. 埋藏物土 ローム土・褐色土主層、黒褐色砂質土アロップ・黒褐色砂子・ローム質アロップ・白色焼土アロップ・焼物散子・ローム散子多、焼物・しまりあり
2. 埋藏物土 黒色土・白色焼土アロップ主層、白色焼土散子・黒褐色砂質土主層・ローム散子多、焼物散、しまりあり

第15図 SB-009・011

SB-010

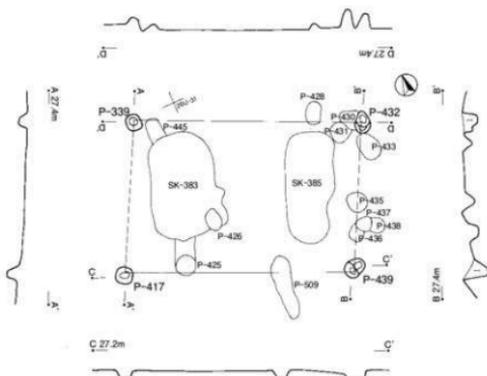


SB-012・015

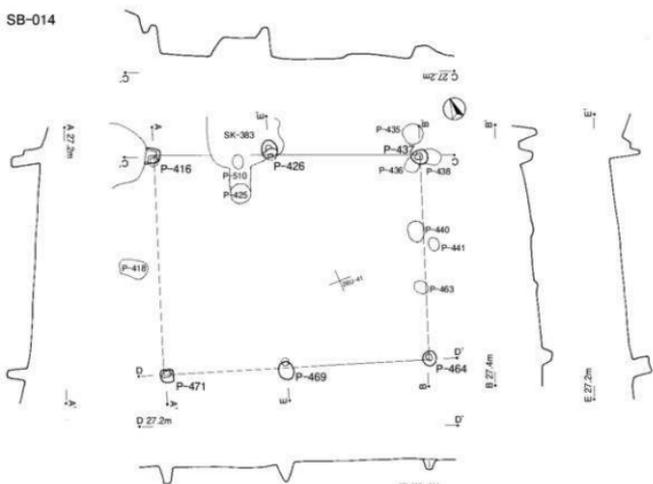


第16図 SB-010・012・015

SB-013

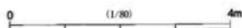


SB-014



SB-013・014

1. 遺構輪郭上 ①-②上土層、白土層上層子集、③-④層子-900色土層、白土層上①②-③層、  
 輪郭-1,2,3,4,5



第17圖 SB-013・014

く存在するが、柱筋が通り、柱間隔が規則的であるものを本建物の柱穴とした。東西桁行は北側で4間分の長さがあるが、南側が不規則で、また、SK-367で削平されていることもあり、不明瞭な点がある。柱穴の掘りかたは円形で、径は24cm～50cmである。確認面からの深さは12cm～46cmを測る。

#### SB-010 (第16図)

調査区中央、26U-32グリッドに位置する。桁行4間×梁行2間の建物と思われる。規模は桁行7.0m×梁行4.5mで、桁行方位はN-72°-Wである。柱穴の掘りかたは円形・楕円形で、径は34cm～63cm、確認面からの深さは29cm～50cmを測る。

#### SB-011 (第15図、図版5)

調査区中央、26U-23グリッドに位置する。桁行4間×梁行2間の建物と思われ、桁行方位N-18°-Eで、SB-009と直交するように重複する。南北梁行の柱穴は明確に確認されたものの、桁行中間の柱穴の所属が不明瞭である。規模は桁行6.4m～6.5m、梁行3.7mを測る。柱穴の掘りかたは円形または楕円形で、径44cm～78cm、深さ32cm～55cmである。

#### SB-012 (第16図、図版5)

調査区中央、26U-21グリッドに位置する。桁行方位はN-70°-Wで、SB-015と桁行方位を同じにし、北側と東側の柱穴列しか検出されなかったため、SB-015の廂である可能性が考えられる。柱穴の掘りかたは円形で、径は25cm～34cmを測る。深さは22cm～50cmである。

#### SB-013 (第17図)

調査区中央、26U-31グリッドに位置する。桁行1間×梁行1間の建物と思われる。規模は桁行4.2m、梁行2.8mを測る。桁行方位はN-68°-Wである。柱穴の掘りかたは円形で、径は30cm～38cmである。確認面からの深さは18cm～24cmを測る。

#### SB-014 (第17図)

調査区中央26U-30グリッドに位置し、SB-013と重複する。桁行2間×梁行1間の建物と思われる。規模は桁行4.8m、梁行3.8m～4.1mである。桁行方位はN-70°-Wである。柱穴の掘りかたは円形で、径は24cm～33cmである。確認面からの深さは20cm～35cmを測る。

#### SB-015 (第16図、図版5)

調査区中央、26U-21グリッドに位置する。残されている柱穴は北側の3か所と南側の2か所で、桁行2間×梁行1間の建物と思われる。柱穴の掘りかたは円形を呈し、径は27cm～33cmである。確認面からの深さは24cm～40cmである。方位を同じにするSB-012は本跡の廂となる可能性が考えられる。

#### 5 井戸状遺構 (第3表)

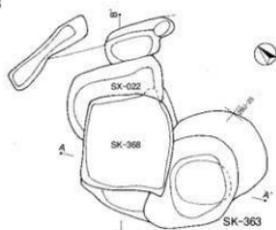
#### SK-363 (第18図、図版9)

調査区北東端部、26U-24グリッドに位置する。北西側をSK-368に切られる。平面形は隅丸方形で、規模は長軸1.20m、短軸1.00mである。確認面から4.4m掘り下げて危険防止のため調査を中止した。壁面はほぼ垂直に下がり、若干すはまる傾向が確認できる。確認面から2.5mほどの深さでオーバーハングする部分が検出された。出土遺物はない。

#### SK-364 (第18図、図版9)

調査区北東端部、26U-24グリッドに位置する。平面形は円形で、径は1.36mである。危険防止のため、深さ2.5mのところまで調査を中止した。堆積土は下層にローム土を多く含み、自然堆積と思われる。出土

SK-363

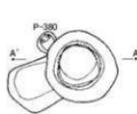


A 28.2m SK-368 SK-363 A'



B 28.5m

SK-364



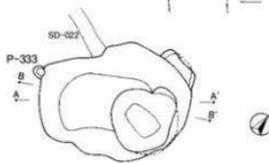
A 27.5m A'

SK-368

1. 遺構色土: ローム土・ロームアゾウク多量。焼色土少。焼性弱。土量多あり
2. 遺構色土: ローム土多量。ロームアゾウク多。焼性弱。土量多あり
3. 遺構色土: 炭焼色土多。焼性弱。土量多あり
4. 炭焼色土: 炭焼色土多。ローム土・ロームアゾウク・白土粘土層子。焼性。土量多あり
5. 炭焼色土: 白土粘土層子。炭アゾウク・ロームアゾウク多。焼性弱。土量多あり
6. 炭焼色土: 焼色土多量。ローム土・ロームアゾウク・炭焼色土多量。焼性。土量多あり
7. 炭焼色土: ロームアゾウク多。ローム土少。焼性弱。土量多あり
8. 炭焼色土: ロームアゾウク多。ローム土少。焼性弱。土量多あり
9. 炭焼色土: ローム粘土多。焼色土多。ロームアゾウク多。焼性多。土量多あり
10. 炭焼色土: ロームアゾウク・炭焼色土多。炭焼色土層子。白土粘土層子少。焼性。土量多あり
11. 炭焼色土: ローム土多。白土粘土層子。炭アゾウク多。炭焼色土層子。ロームアゾウク・ローム粘土少。焼性弱。土量多あり

23.6m

SK-369



A 27.5m A'

B 27.5m B'

0 (1/80) 4m

SK-369

1. 遺構色土: 焼色土多量。ローム粘土多。炭焼色土層子。ローム土・ロームアゾウク多。焼性。土量多あり
2. 遺構色土: 焼色土多量。焼色土・ロームアゾウク多。ローム土・ローム粘土。白土粘土層子多。焼性。土量多あり
3. 遺構色土: 炭焼色土多。ローム土・ローム粘土。白土粘土層子。ロームアゾウク多。炭焼色土層子。ローム土・ローム粘土。焼性。土量多あり
4. 炭焼色土: 炭焼色土多。ローム土・ローム粘土。白土粘土層子。炭アゾウク多。炭焼色土層子。ローム土・ローム粘土。焼性。土量多あり
5. 炭焼色土: 炭焼色土多。ローム土・ローム粘土。白土粘土層子。炭アゾウク多。炭焼色土層子。ローム土・ローム粘土。焼性。土量多あり
6. 炭焼色土: 炭焼色土多。ローム粘土。炭焼色土層子。ローム土少。炭焼色土層子。ローム土・ローム粘土。焼性。土量多あり
7. 炭焼色土: 炭焼色土多。ローム粘土。炭焼色土層子。ローム土少。炭焼色土層子。ローム土・ローム粘土。焼性。土量多あり
8. 炭焼色土: 炭焼色土多。ローム粘土。炭焼色土層子。ローム土少。炭焼色土層子。ローム土・ローム粘土。焼性。土量多あり
9. 炭焼色土: 炭焼色土多。ローム粘土。炭焼色土層子。ローム土少。炭焼色土層子。ローム土・ローム粘土。焼性。土量多あり
10. 炭焼色土: 炭焼色土多。ローム粘土。炭焼色土層子。ローム土少。炭焼色土層子。ローム土・ローム粘土。焼性。土量多あり
11. 炭焼色土: 炭焼色土多。ローム粘土。炭焼色土層子。ローム土少。炭焼色土層子。ローム土・ローム粘土。焼性。土量多あり
12. 炭焼色土: 炭焼色土多。ローム粘土。炭焼色土層子。ローム土少。炭焼色土層子。ローム土・ローム粘土。焼性。土量多あり
13. 炭焼色土: 炭焼色土多。ローム粘土。炭焼色土層子。ローム土少。炭焼色土層子。ローム土・ローム粘土。焼性。土量多あり
14. 炭焼色土: 炭焼色土多。ローム粘土。炭焼色土層子。ローム土少。炭焼色土層子。ローム土・ローム粘土。焼性。土量多あり
15. 炭焼色土: 炭焼色土多。ローム粘土。炭焼色土層子。ローム土少。炭焼色土層子。ローム土・ローム粘土。焼性。土量多あり
16. 炭焼色土: 炭焼色土多。ローム粘土。炭焼色土層子。ローム土少。炭焼色土層子。ローム土・ローム粘土。焼性。土量多あり

第18図 SK-363・364・369

遺物はない。

#### SK-369 (第18図、図版9)

調査区北側、26U-13グリッドに位置する。平面形は不整形で、楕円形の土坑と重複して円形の井戸を構築しているようである。径は1.10 mである。堆積土はローム土主体の暗褐色土で、自然堆積と思われる。出土遺物はない。

#### 6 地下式坑 (第3表)

地下式坑は4基検出した。SK-402はI台地整形区画北東隅、ほかの3基はH台地整形区画南西端にまとまっており、入り口部を区画内に向けていた。

#### SK-384 (第19図、図版9)

調査区西側、26U-30グリッドに位置する。SK-408が重複して上に構築されており、天井部は確認できなかった。主室は横長の方形で、長さ2.50 m、幅3.38 mを測る。深さは東側の確認面から入り口部底面までは82cm、入り口部底面から主室底面までが35cm～37cm、西側の確認面から主室底面までが1.14 mである。主軸方向はN-73°-Wである。堆積土は入り口部から奥壁に向かって流れ込む。出土遺物はない。

#### SK-402 (第19図、図版8)

調査区南側25U-49グリッドに位置する。I台地整形区画の北東隅に構築されている。平面形は隅丸の方形を呈する。一辺は2.36 m～2.48 mである。南西隅付近が入り口部で、階段状に下がり主室に至る構造と考えられる。台地整形の掘り込み部分を利用している。褐色土主体で自然堆積の様相である。出土遺物はない。

#### SK-406 (第19図、図版9)

調査区西側、26U-21グリッドに位置する。西壁をSK-407に切られる。入り口部の形状は方形で、主室は横長の方形を呈している。主軸方向はN-10°-Eである。全体の長さ2.54 m、最大幅は2.42 mを測る。深さは、南側の確認面から入り口部底面までは58cm、入り口部底面から主室底面までが49cm～53cm、北側の確認面から主室底面までは99cmである。網かけの範囲に白色粘土が貼られていることが確認でき、その状況から天井部などにも白色粘土が貼られていたと思われる。上層から下層まで白色粘土ブロック・粒子が含まれており、天井部崩落の状況がうかがえる。入り口部付近から主室の入り口付近はロームブロックや黒色土を主体とした褐色土が流れこんでおり、天井部崩落の後、自然堆積により埋まったものと考えられる。当該時期の出土遺物はない。

#### SK-407 (第19図、図版6・9)

調査区西側、26U-20グリッドに位置し、SK-406を切る。入り口部の形状は方形で、主室は東西方向に長い方形である。入り口部の向きは主室に対して直角ではなく東に振れている。主軸方向はSK-406と同様にN-10°-Eである。全体の長さは2.65 m、最大幅は2.54 mを測る。入り口部は3段の階段状を呈し、確認面から1段目の深さは1.22 m、1段目から2段目は4 cm、2段目から3段目は30cmの段差を測る。主室の深さは入り口階段の3段目から47cmである。北側の確認面からの深さは2.42 mを測る。奥壁は若干オーバーハングしている。堆積土中層でローム土主体の暗黄褐色土が確認でき、その上層に黒色土主体の層があることから、天井部崩落後に、土砂の流入により埋まっていった状況がうかがえる。白色粘土が含まれるのは、SK-406を壊して本遺構を構築したことによると考えられる。出土遺物はない。

SK-384



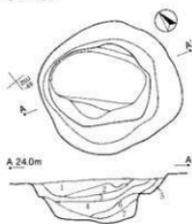
SK-384 A-A'

1. 硬質褐色土 厚土層、褐色土、ローム粒子多、ロームアロップ、黄褐色硬質アロップ多、粘性、しまりあり
2. 硬質褐色土 ローム土層、ロームアロップ多、ローム粒子多、粘性、しまりあり
3. 硬質褐色土 ローム土層、ロームアロップ多、褐色土、ローム粒子多、粘性、しまりあり
4. 硬質褐色土 ローム土層、ロームアロップ多、ローム粒子多、粘性、しまりあり
5. 硬質褐色土 ローム土層、褐色土、ロームアロップ多、ローム粒子多、粘性、しまりあり
6. 硬質褐色土 ローム土層、褐色土、ロームアロップ多、粘性、しまりあり
7. 硬質褐色土 ローム土層、ロームアロップ多、粘性、しまりあり
8. 硬質褐色土 ローム土層、ロームアロップ多、ロームアロップ、白色粘土アロップ多、粘性、しまりあり
9. 硬質褐色土 ローム土層、褐色土、ローム粒子多、白色粘土粒子少、粘性、しまりあり
10. 硬質褐色土 ローム土層、褐色土、ローム粒子多、ロームアロップ多、粘性、しまりあり
11. 硬質褐色土 ローム土層、褐色土、ロームアロップ、白色粘土粒子少、粘性、しまりあり
12. 硬質褐色土 厚土層、褐色土、白色粘土粒子多、粘性、しまりあり

SK-384 B-B'

1. 硬質褐色土 厚土層、褐色土、ローム土、ローム粒子多、ロームアロップ、白色粘土粒子少、粘性、しまりあり
2. 硬質褐色土 厚土層、ロームアロップ多、ロームアロップ多、粘性、しまりあり
3. 硬質褐色土 白色粘土、ローム土、ローム土、白色粘土粒子多、粘性、しまりあり
4. 硬質褐色土 ローム土層、ロームアロップ多、白色粘土粒子少、粘性アロップ多、粘性、しまりあり
5. 硬質褐色土 ロームアロップ、褐色土、白色粘土粒子多、ローム粒子少、粘性、しまりあり
6. 硬質褐色土 白色粘土、粘土土層、ローム土、ロームアロップ、ローム粒子多、粘性、しまりあり

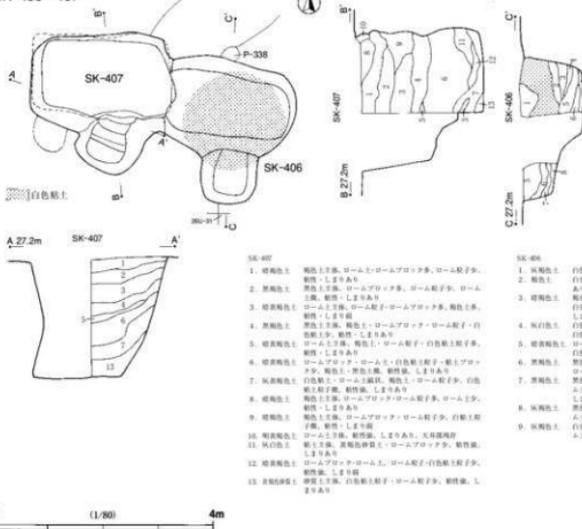
SK-402



SK-402

1. 硬質褐色土 黄褐色土、白色粘土層、褐色土、硬質土層、ロームアロップ、白色粘土アロップ多、粘性アロップ多、粘性、しまりあり
2. 硬質褐色土 ローム土、白色粘土層、硬質アロップ多、褐色土、粘性、しまりあり
3. 硬質褐色土 褐色土層、白色粘土、黄褐色硬質土層多、白色粘土アロップ多、粘性、しまりあり
4. 硬質褐色土 硬質土層、硬質アロップ多、白色粘土アロップ多、褐色土、粘性、しまりあり
5. 硬質褐色土 硬質土層、硬質アロップ多、褐色土、粘性、しまりあり
6. 硬質褐色土 黄褐色硬質土、褐色土、黄褐色硬質アロップ、白色粘土アロップ多、粘性、しまりあり
7. 硬質褐色土 黄褐色硬質土層、黄褐色硬質アロップ、白色粘土アロップ多、粘性、しまりあり

SK-406・407



SK-407

1. 硬質褐色土 褐色土層、ローム土、ロームアロップ多、ローム粒子多、粘性、しまりあり
2. 硬質褐色土 厚土層、ロームアロップ多、ローム粒子多、ローム土層、粘性、しまりあり
3. 硬質褐色土 ローム土層、ローム粒子多、ロームアロップ多、褐色土、粘性、しまりあり
4. 硬質褐色土 厚土層、褐色土、ロームアロップ多、ローム粒子多、白色粘土、粘性、しまりあり
5. 硬質褐色土 ローム土層、褐色土、ローム粒子多、白色粘土粒子多、粘性、しまりあり
6. 硬質褐色土 ロームアロップ、ローム土、白色粘土層、粘土アロップ多、褐色土、粘性、しまりあり
7. 硬質褐色土 白色粘土、白色粘土層、褐色土、ローム粒子多、白色粘土層、粘性、しまりあり
8. 硬質褐色土 褐色土層、ロームアロップ多、ローム粒子多、ローム土層、粘性、しまりあり
9. 硬質褐色土 褐色土層、ロームアロップ多、ローム粒子多、白色粘土粒子多、粘性、しまりあり
10. 硬質褐色土 粘土土層、粘性、しまりあり、大粒径塊状
11. 硬質褐色土 粘土土層、黄褐色硬質土層、ロームアロップ多、粘性、しまりあり
12. 硬質褐色土 ロームアロップ多、ローム土、ローム粒子多、白色粘土粒子少、粘性、しまりあり
13. 黄褐色硬質土 硬質土層、白色粘土粒子多、ローム粒子少、粘性、しまりあり

SK-406

1. 硬質褐色土 白色粘土、褐色土、粘性、しまりあり
2. 硬質褐色土 白色粘土アロップ多、ローム土層、粘性、しまりあり
3. 硬質褐色土 褐色土層、褐色土、ローム土、ローム粒子多、白色粘土アロップ多、粘性、しまりあり
4. 硬質褐色土 白色粘土アロップ多、褐色土、白色粘土アロップ多、白色粘土層、粘性、しまりあり
5. 硬質褐色土 ローム土、ロームアロップ多、ローム粒子多、ローム土層、褐色土、粘性、しまりあり
6. 硬質褐色土 褐色土層、褐色土、ローム土、白色粘土粒子多、ロームアロップ多、粘性、しまりあり
7. 硬質褐色土 褐色土層、白色粘土アロップ多、褐色土、粘性、しまりあり
8. 硬質褐色土 褐色土層、白色粘土アロップ多、粘土土層、ローム土層、粘性、しまりあり
9. 硬質褐色土 白色粘土アロップ多、褐色土、ローム土層、粘性、しまりあり

第19図 SK-384・402・406・407

#### 第4節 その他の遺構と遺物

性格不明の土坑類と遺構外出土遺物について記述する。

##### 1 遺構（第3表）

###### SK-367（第20図、図版6）

調査区中央、26U-23グリッドに位置する。東西に長い方形を呈し、確認面での長軸は2.02m、短軸0.84mを測る。確認面からの深さは34cmである。堆積土にはロームブロックを多く含み、埋め戻された様相がうかがえる。

###### SK-371（第20図、図版5）

調査区中央、26U-32グリッドに位置する。東西方向に長い方形を呈し、長軸は2.30m、短軸は1.60mを測る。確認面からの深さは50cm～68cmである。東西壁に張り出しがあり、その部分が一段高い構造となっている。東西壁に接する小穴2基はSB-011の柱穴で、本遺構に伴うものではない。1の小皿が1点出土した。古瀬戸緑軸小皿の口縁部で、胎土は黄白色、淡黄緑色の灰軸が施されている。藤澤編年古瀬戸後期1型式に該当する。

###### SK-372（第20図）

調査区東側、26U-42グリッドに位置する。平面形は不整の円形で、径は確認面で1.25mである。底面は平坦で確認面からの深さは26cmを測る。壁際に粘土ブロック主体の灰褐色土が確認できた。粘土貼りの痕跡と考えられる。堆積土はローム土が主体で、埋め戻されたものと思われる。

###### SK-374（第20図、図版6）

調査区中央、26U-41グリッドに位置する。南北方向に長い楕円形を呈し、長軸1.70m、短軸1.10mを測る。底面での長軸1.0m、短軸0.6mである。確認面からの深さは82cmである。堆積土はローム土が主体で、埋め戻されたと思われる。

###### SK-375A・B（第20図、図版6）

調査区中央、26U-43グリッドに位置する。SK-375BはSK-375Aに切られ、2基はSK-376に切られている。Aは東西方向に長い不整の楕円形を呈している。確認面で短径は2.30mを測る。中位までなだらかに掘り込まれた後に、底面に向かい急な掘り込みになる。確認面からの深さは56cmである。Bは遺存状態が悪く、平面形なども含め不明瞭である。

###### SK-376（第20図、図版6）

26U-43グリッドに位置し、SK-375A・Bと方形竪穴状遺構SI-158を切っている。長軸2.40m、短軸2.20mの方形の平面形を呈する。確認面からの深さは46cm～54cmである。堆積土は下層が黒色土主体、上層はローム土を多く含む層である。

###### SK-377（第20図、図版7）

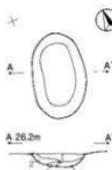
調査区東端、26U-44グリッドに位置する。方形竪穴状遺構SI-158の東壁を切っている。平面形は南北に僅かに長い方形を呈している。長軸1.62m、短軸1.18mを測る。確認面からの深さは72cmである。堆積土はローム土主体で、埋め戻しの様相である。

###### SK-380（第21図、図版7）

調査区南側、26U-51グリッドに位置する。南北方向に長い楕円形を呈し、長径1.56m、短径0.96mである。確認面からの深さは28cmを測る。



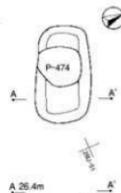
SK-380



SK-380

1. 灰青褐色土 灰褐色土多量、ローム土・白色粘土粒子多、ローム粒子・ロームコアフラック多、観察し、しまりあり
2. 灰青褐色土 ローム土多量、灰褐色土・白色粘土コアフラック・ローム粒子・ロームコアフラック・炭褐色砂質土粒子多、観察し、しまりあり
3. 灰青褐色土 黒褐色土・灰褐色土・粘土・粘質土、しまりあり
4. 灰青褐色土 ローム土多量、白色粘土・粘土コアフラック・炭褐色砂質土コアフラック多、観察し、しまりあり

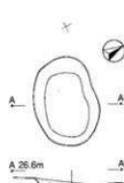
SK-381



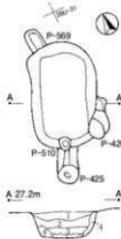
SK-381

1. 灰青褐色土 ローム土・灰褐色土・白色粘土粒子・白色粘土コアフラック多、炭褐色砂質土粒子少、観察し、しまりあり
2. 灰青褐色土 ローム土・灰褐色土・白色粘土粒子・白色粘土コアフラック・炭褐色砂質土コアフラック多、観察し、しまりあり

SK-382



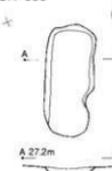
SK-383



SK-383

1. 灰青褐色土 ローム土多量、褐色土・ローム粒子・炭褐色砂質土粒子多、白色粘土粒子・ロームコアフラック多、観察し、しまりあり
2. 灰青褐色土 ローム土多量、褐色土・ロームコアフラック・ローム粒子・白色粘土粒子多、観察し、しまりあり
3. 灰青褐色土 褐色土多量、ローム粒子・ロームコアフラック・炭褐色砂質土粒子・白色粘土粒子多、観察し、しまりあり
4. 灰青褐色土 褐色土多量、白色粘土コアフラック・ロームコアフラック・白色粘土粒子多、観察し、しまりあり
5. 灰青褐色土 ローム土多量、ローム粒子・ロームコアフラック多、白色粘土コアフラック・粘土粒子多、観察し、しまりあり

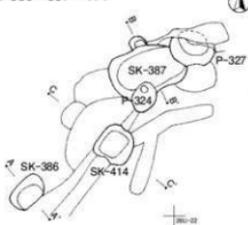
SK-385



SK-385

1. 暗青褐色土 ローム土多量、褐色土・ローム粒子多、白色粘土粒子少、観察し、しまりあり

SK-386・387・414

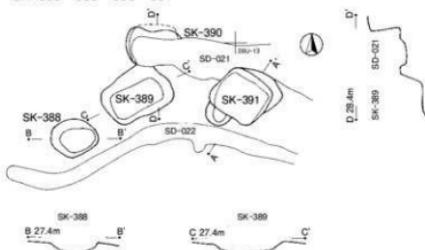


27.7m SK-387

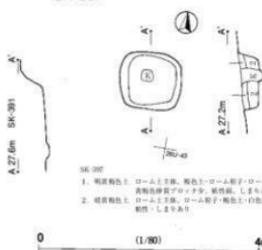
27.7m SK-414

27.7m SK-386

SK-388・389・390・391



SK-397



SK-397

1. 暗青褐色土 ローム土多量、褐色土・ローム粒子・ロームコアフラック・炭褐色砂質土コアフラック多、観察し、しまりあり
2. 暗青褐色土 ローム土多量、ローム粒子・褐色土・白色粘土粒子多、観察し、しまりあり

第21図 土坑(2)

SK-381 (第21図、図版7)

調査区南側、26U-40グリッドに位置する。東西方向に長い方形を呈する。長軸1.78m、短軸0.98m、確認面からの深さは20cmを測る。掘立柱建物SB-008の柱穴P-474と重複する。

SK-382 (第21図、図版7)

調査区南側、26U-40グリッドに位置する。平面形は東西方向に長い楕円形で、長径1.64m、短径1.14mを測る。確認面からの深さは30cmほどである。ローム土主体の堆積土で埋め戻されたとと思われる。

SK-383 (第21図、図版7)

調査区中央、26U-31グリッドに位置する。3基の地下式坑SK-384・406・407の前面に位置する。本遺構の東に位置するSK-385と長軸方向を同一にする。平面形は南北方向に長い方形である。長軸1.92m、短軸1.18m、確認面からの深さは50cmである。南東隅に掘立柱建物SB-014の柱穴が掘り込まれているが、新旧関係は不明瞭である。堆積土はローム土主体で埋め戻しの様相である。

SK-385 (第21図、図版7)

SK-383の東隣、26U-31グリッドに位置する。平面形は南北方向に長い方形で、長軸2.06m、短軸0.90m、深さ14cmである。堆積土はローム主体の暗黄褐色土で、埋め戻されたとと思われる。

SK-387 (第21図、図版7)

調査区北側、26U-11グリッドに位置する。溝状遺構SD-022に隣接し、その北側に位置するSD-023との間に構築されている。P-324・327と切り合っている。確認面からの深さは56cmを測る。

SK-388 (第21図、図版7)

調査区北側、26U-12グリッドに位置する。溝状遺構SD-022とSD-023とに挟まれた位置にある。平面形は不整の円形で、長径0.85m、短径0.70mである。確認面からの深さは18cmである。

SK-389 (第21図、図版7)

調査区北側、26U-12グリッドに位置する。SK-388、SK-391と並び、溝状遺構SD-022とSD-021との間に位置する。平面形は東西方向に長い方形を呈する。長軸1.24m、短軸0.90mを測る。確認面からの深さは20cmである。

SK-391 (第21図、図版8)

SK-389の東側、26U-12グリッドに位置し、SD-021を切る。平面形は方形で、長軸1.26m、短軸1.00mである。確認面からの深さは42cmを測る。南側に円形に突出するピットを持つ。

SK-397 (第21図、図版8)

調査区中央、26U-32グリッドに位置する。平面形は隅丸の方形である。一辺1.06m～1.10mを測る。確認面からの深さは36cmを測る。中央に位置するピットは本遺構に伴うものではなく、後世に掘り込まれたものである。堆積土はローム土主体で、埋め戻しの様相である。

SK-401 (第22図、図版8・11)

調査区南側、J台地整形区画内の26U-53グリッドに位置する。平面形は東西に長い方形で、長軸1.26m、短軸1.02mを測る。底面は平坦で、確認面からの深さは40cmである。覆土下層から礫石1点を出土した。1は、最大長9.8cm、最大幅2.7cm、最大厚2.0cmで、使用により両端がすり減っている。

SK-403～405 (第22図、図版8・10)

調査区西側、I台地整形区画内の25U-48グリッド付近に位置する。SK-403、SK-404は円形を呈し、



底面は平坦で一辺は0.70 mを測る。確認面からの深さは38cmである。

#### SK-411 (第22図)

SK-410の北側、26U-31グリッドに位置する。不整な円形を呈し、長径1.04 m、短径0.88 mを測る。確認面からの深さは8 cmと浅い。

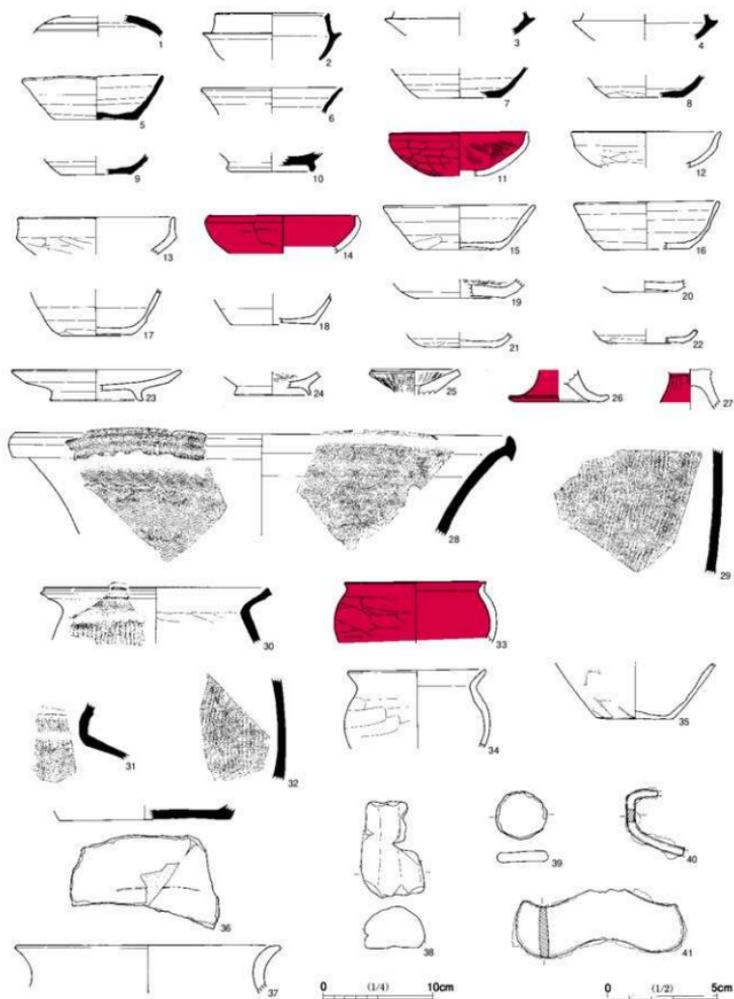
#### 2 遺物 (第4・5表、第23・24図、図版11)

1～10は須恵器杯で、1は蓋、2～10は身である。11～24は土師器杯である。25は器台の器受け部、26、27は高杯脚部である。28～32・36は須恵器甕の破片で、28は館ノ山遺跡(5)出土遺物で唯一図化できたものである。36は底部外面中央にヘラ書きを施している。33～35・37は土師器甕である。

38・39は土製品で、38は土製支脚である。39は土製円盤で、土器片の周囲を研磨して円形に仕上げている。土師器甕片を利用したものと考えられる。

40・41は鉄製品である。40は棒状製品、41は鏡金であろう。42～46は銭貨である。6点出土したが、1点は遺存状態が非常に悪く図化できなかった。溝状遺構や台地整形区画内などから出土した。42は皇宋通寶、43は水楽通寶の模鑄銭、44～46は寛永通寶である。

47～49は縄文時代の石器である。47・49は磨石、48は敲石として使用されている。50は砥石である。凝灰岩製で、最大長5.1cm、最大幅2.5cm、最大厚1.8cmで、上部に穿孔がある。



第23图 出土遺物(1)

第4表 土器観察表

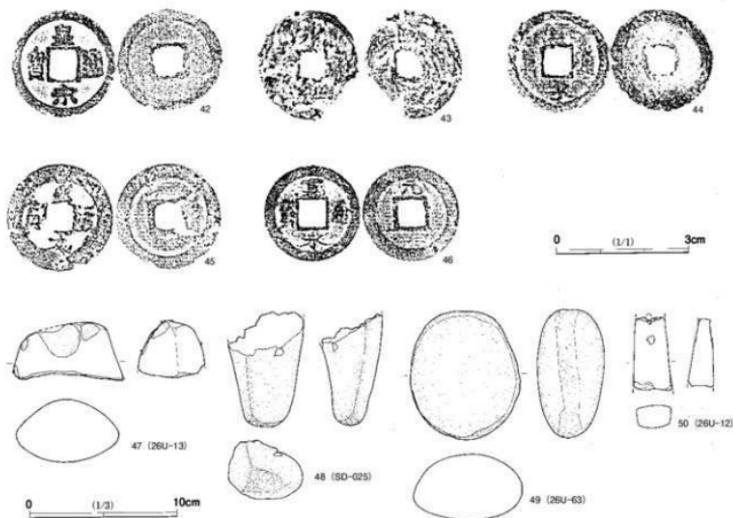
( ) 復元値, [ ] 遺存値, 単位: cm

出土遺物	拝見番号	器形	遺物番号	口径	底径	器高	色調	遺跡		備考	
								内部	外部		
SI-159	8	1	土師器 杯	2・74・75・76	13.8	-	4.0	橙褐色	ナナクサコナダ	ナナクサコナダ	
SI-159	8	2	土師器 杯	8	(11.6)	-	(3.9)	褐色	ナナクサコナダ	ナナクサコナダ	
SI-159	8	3	土師器 杯	2・73	(12.3)	-	(3.9)	黒褐色	ナナクサコナダ	ナナクサコナダ	
SI-159	8	4	土師器 杯	75	(13.8)	-	(4.0)	赤褐色	ナナクサコナダ	ナナクサコナダ	
SI-159	8	5	土師器 杯	70	(15.0)	-	(3.4)	橙褐色	ナナクサコナダ	ナナクサコナダ	
SI-159	8	6	土師器 甕	1・2・6・33・37・47	(14.7)	-	(10.4)	橙褐色	ナナクサコナダ	ナナクサコナダ	
SI-159	8	7	土師器 甕	1・2・6・33・37・47	(15.5)	-	(16.3)	赤褐色	ナナクサコナダ	ナナクサコナダ	
SI-159	8	8	土師器 瓶	1・12・63	-	-	(11.1)	黒褐色	ナナクサコナダ	ナナクサコナダ	
SI-159	8	9	土師器 甕	38	-	(8.3)	(2.6)	褐色	ナナクサコナダ	ナナクサコナダ	
SI-159	8	10	土師器 甕	2	-	(7.8)	(2.5)	赤褐色	ナナクサコナダ	ナナクサコナダ	
SI-159	8	11	土師器 甕	36	-	(10.8)	(1.9)	黒褐色	ナナクサコナダ	ナナクサコナダ	
SI-160	8	1	須恵器 杯	2・7	(13.5)	(6.5)	4.3	灰色	ナナクサコナダ	ナナクサコナダ	
SI-160	8	2	須恵器 杯	1・2・3	(13.0)	(6.0)	4.3	灰褐色	ナナクサコナダ	ナナクサコナダ	
SI-160	8	3	須恵器 杯	9	-	6.9	(2.3)	赤褐色	ナナクサコナダ	ナナクサコナダ	
SI-160	8	4	須恵器 甕	1・4・6・8	(13.0)	-	(7.4)	赤褐色	ナナクサコナダ	ナナクサコナダ	
遺構外	23	1	須恵器 甕	日台地整形 26U-11-1	-	-	(2.0)	灰色	ナナクサコナダ	ナナクサコナダ	
遺構外	23	2	須恵器 杯	日台地整形 26U-21-1	(10.4)	-	-	(4.5)	灰色	ナナクサコナダ	
遺構外	23	3	須恵器 杯	日台地整形 26U-30-1	-	-	(2.2)	黒褐色	ナナクサコナダ	ナナクサコナダ	
遺構外	23	4	須恵器 杯	SK-106-1	-	-	(2.4)	灰褐色	ナナクサコナダ	ナナクサコナダ	
遺構外	23	5	須恵器 杯	SK-106-1・SK-275-1	12.7	7.5	4.1	灰褐色	ナナクサコナダ	ナナクサコナダ	
遺構外	23	6	須恵器 杯	日台地整形 26U-32-1・26U-63-1	(12.7)	-	(2.5)	灰色	ナナクサコナダ	ナナクサコナダ	
遺構外	23	7	須恵器 杯	日台地整形 26U-64-1	-	(7.4)	(2.8)	灰色	ナナクサコナダ	ナナクサコナダ	
遺構外	23	8	須恵器 杯	日台地整形 26U-63-1	-	(6.7)	(2.1)	灰色	ナナクサコナダ	ナナクサコナダ	
遺構外	23	9	須恵器 杯	日台地整形 26U-63-1	-	(6.4)	(1.8)	灰色	ナナクサコナダ	ナナクサコナダ	
遺構外	23	10	須恵器 杯	SK-364-2	-	(7.6)	(1.8)	灰白色	ナナクサコナダ	ナナクサコナダ	
遺構外	23	11	土師器 杯	SK-384-1	(12.3)	-	(4.1)	褐色	ナナクサコナダ	ナナクサコナダ	内外面赤彩
遺構外	23	12	土師器 杯	日台地整形 26U-23-1	(13.5)	-	(3.3)	黒褐色	ナナクサコナダ	ナナクサコナダ	
遺構外	23	13	土師器 杯	日台地整形 26U-13-1	(14.0)	-	(3.5)	褐色	ナナクサコナダ	ナナクサコナダ	
遺構外	23	14	土師器 杯	SK-107-1	(13.3)	-	(3.5)	赤褐色	ナナクサコナダ	ナナクサコナダ	内外面赤彩
遺構外	23	15	土師器 杯	SK-384-1・SK-369-1・26U-13-1	(13.5)	(7.4)	4.1	赤褐色	ナナクサコナダ	ナナクサコナダ	
遺構外	23	16	土師器 杯	日台地整形 26U-63-1	(12.8)	(7.8)	4.4	黒褐色	ナナクサコナダ	ナナクサコナダ	
遺構外	23	17	土師器 杯	SD-026-1	-	(6.3)	(4.3)	黒褐色	ナナクサコナダ	ナナクサコナダ	
遺構外	23	18	土師器 杯	日台地整形 26U-63-1	-	(7.6)	(2.9)	赤褐色	ナナクサコナダ	ナナクサコナダ	
遺構外	23	19	土師器 杯	日台地整形 26U-63-1	-	(8.2)	(1.9)	赤褐色	ナナクサコナダ	ナナクサコナダ	内面黒色処理
遺構外	23	20	土師器 杯	SK-384-2	-	(5.8)	(1.0)	褐色	ナナクサコナダ	ナナクサコナダ	
遺構外	23	21	土師器 杯	SD-025-1	-	(6.4)	(1.5)	黒褐色	ナナクサコナダ	ナナクサコナダ	
遺構外	23	22	土師器 杯	日台地整形 26U-52-1	-	(6.9)	(1.4)	黄褐色	ナナクサコナダ	ナナクサコナダ	
遺構外	23	23	土師器 甕	日台地整形 26U-64-1	(13.2)	(8.3)	(2.9)	赤褐色	ナナクサコナダ	ナナクサコナダ	
遺構外	23	24	土師器 甕	日台地整形 26U-63-1	-	(6.8)	(2.2)	赤褐色	ナナクサコナダ	ナナクサコナダ	
遺構外	23	25	土師器 甕	SK-106-1	7.7	-	(2.5)	褐色	ナナクサコナダ	ナナクサコナダ	
遺構外	23	26	土師器 甕	日台地整形 26U-12-1	-	(7.9)	(3.0)	赤褐色	ナナクサコナダ	ナナクサコナダ	外面赤彩
遺構外	23	27	土師器 甕	日台地整形 26U-64-1	-	-	(2.7)	赤褐色	ナナクサコナダ	ナナクサコナダ	外面赤彩
遺構外	23	28	須恵器 甕	26S-27-1	(44.9)	-	(9.3)	灰色	ナナクサコナダ	ナナクサコナダ	
遺構外	23	29	須恵器 甕	SK-106-2	-	-	-	灰色	ナナクサコナダ	ナナクサコナダ	外面ヘウ書き
遺構外	23	30	須恵器 甕	SK-102-2	(20.1)	-	(5.1)	褐色	ナナクサコナダ	ナナクサコナダ	
遺構外	23	31	須恵器 甕	日台地整形 26U-12-1	-	-	-	灰色	ナナクサコナダ	ナナクサコナダ	
遺構外	23	32	須恵器 甕	SK-384-3	-	-	-	灰色	ナナクサコナダ	ナナクサコナダ	
遺構外	23	33	土師器 甕	SD-026-1	(12.7)	-	(5.6)	赤褐色	ナナクサコナダ	ナナクサコナダ	内外面赤彩
遺構外	23	34	土師器 甕	日台地整形 26U-14-1	(12.4)	-	(7.3)	褐色	ナナクサコナダ	ナナクサコナダ	
遺構外	23	35	土師器 甕	SK-384-1	-	(7.0)	(5.3)	灰褐色	ナナクサコナダ	ナナクサコナダ	
遺構外	23	36	須恵器 甕	日台地整形 26U-53-1・26U-64-1	-	(15.5)	(1.3)	赤褐色	ナナクサコナダ	ナナクサコナダ	底部外面ヘウ書き
遺構外	23	37	土師器 甕	SK-106-1	(12.7)	-	(4.5)	黄褐色	ナナクサコナダ	ナナクサコナダ	

第5表 錢貨計測表

計測位置は凡例参照

出土遺構	挿図番号	遺物番号	種類	時代	材質	G (mm)	N (mm)	g (mm)	n (mm)	T (mm)	重量 (g)	
SD-026	24	42	2	皇宋通寶	北宋	銅	24.42	20.30	8.86	6.50	1.19	2.5
SK-363	24	43	2	永樂通寶	近世	銅	24.71	21.22	9.07	4.90	1.72	2.5
H台地整形区画	24	44	26U-32-11	寬永通寶	近世	銅	23.58	19.83	8.58	6.20	1.06	1.8
H台地整形区画	24	45	26U-23-10	寬永通寶	近世	銅	24.64	17.18	8.62	6.10	1.29	2.1
H台地整形区画	24	46	26U-12-39	寬永通寶	近世	銅	22.45	17.65	8.32	6.20	1.06	1.7



第24図 出土遺物(2)

### 第3章 まとめ

本章では、既に報告された部分も含めて、館ノ山遺跡の掘立柱建物群からなる館の構造について見ておきたい。

まず、館の台地上での位置についてである。遺跡が立地する台地は、第1章で記述したように大きな台地の先端部に当たり、北東側はせまい尾根で台地本体とつながっている。東・西・南の三方を深い谷津に囲まれ、北から南へ向かって幅が増す台形を呈している。標高は北東部分が最も高く、そこから南東と南西に向かって低くなっている。館は北側の最も高い位置ではなく、南側の3m～5m低い場所に築かれている。

こうした立地は、あたかも冬の北風を避けたかのようである。季節風が吹きつける北西側に土塁が築かれていたことは（『四街道市館ノ山遺跡-物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ-』210～213頁、以下『報告書』とする）、こうした推測を支持しよう。さらに、(4)の調査範囲の南側で検出された斜面を南へ下るSD-026の階段状の溝は、館と台地下の谷津の縁をめぐる道とをつなぐ通路と見ることができ、館の出入口は南側にあったと考えられる。このことも上記の推測を支持しよう。

館の造営には、北西-南東方向の基準方位が設けられていたと思われる。掘立柱建物の桁行方向、台地整形区画の方向がこの方位に揃えられている。こうした基準方位は、東側に位置する鶴越遺跡の中世遺構には見られない。西側の小屋ノ内遺跡では、館ノ山遺跡に面する東部地区のSX-032の台地整形区画と内部の掘立柱建物に同じ方位の規格がうかがえるが（『四街道市小屋ノ内遺跡（2）-物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ-』第578図）、これは、台地整形区画の東端に南西方向にのびる台地があるのを基準にしたと考えられる。したがって、館ノ山遺跡の館造営の基準方位は、館が築かれた場所が工事着手前から北東側に比べて一段低い地形であり、境となる斜面がこの方位でのびていたためと考えてよからう。ただ、北側の北ノ作遺跡の主郭で検出された掘立柱建物群を見ると、桁行方向の多くは南北であるが、SB-003-004は、桁行方向が北西-南東で、館ノ山遺跡の掘立柱建物の桁行方向と同じである。北ノ作遺跡の場合、掘立柱建物の向きは地形や土塁に左右されるように見えないので、意図的である可能性が高い。このことは、時期が同じである四街道市栗山の池ノ尻館跡<sup>1)</sup>、千葉市若葉区の南屋敷遺跡<sup>2)</sup>・高品城跡<sup>3)</sup>の掘立柱建物においても桁行方向が同じであることから言えようか。

館の場所が北側に比べて一段低い要因は、本来の自然地形によるのではなく、人為的な地形改変によるであろう。自然地形であれば館の部分にも関東ローム層が存在するはずであるが、館の西側斜面では関東ローム層が失われていた（『報告書』4頁）。低くなった時期については、ここに縄文時代後期の遺物包含層が見られたこと（『報告書』18頁）から、その時期またはそれ以前であろう。縄文時代後期は、大規模な地形改変の例が各地の遺跡で知られている時期である。最も近いところでは、佐倉市野井長割遺跡の環状盛土遺構がある。館ノ山遺跡では東側の区域で当該時期の竪穴住居が2軒検出されており、想定される地形改変の時期として縄文時代後期の可能性が考えられる。その後、中世になって、台地整形を行い館が造られているが、最も深く削られているはずの北側の高台下でも、(4)の調査範囲の台地整形区画の北縁にかかる古墳時代後期の竪穴住居SI-159の掘り込みが25cm～30cm残っていたことから、その地形改変の程度は、当該時期の竪穴住居の平均的な深さから最大で1.5m程度で、数mも掘り下げようものではなかったと考えられる。

館の敷地範囲については、遺跡を南北に横切る切り通し状の道路があり、その東側まで広がるか否かである。道路西側の(4)の調査では標高28m近くで掘立柱建物群を検出しているため、標高27m近くまで掘り下げた東側地区でも掘立柱建物を検出できたはずで、東側地区には掘立柱建物はなかったと判断される。この点からは、館の敷地範囲は道路までであった可能性がある。また、道路東側の法面の上に土手状の高まりがあったことが等高線から読み取れ、この高まりが館の境であった可能性がある。一方、館の敷地の内外を区切った溝と思われるSD-012(SD-020)の東端とSD-001の西端が走行方向からつながっていた可能性もあり、そうであれば、館の敷地は道路の東側まで広がっていたこともあり得る。現状ではどちらと断定することは難しい。なお、南北に横切る道路の西側で検出されたSX-001とその南側の続きと考えられるSD-024・025は、位置と断面から上記の道路の法面が土砂で埋まったものと判断される。

なお、遺跡を南北に横切る道路が造られた時期は確定できないが、古墳時代後期の竪穴住居であるSI-009・032がこの道路に壊されているので、古墳時代後期以後で、明治20年作成の陸軍迅速図「下志津村」には、この道路が記載されているので、それ以前である。

館内の構造を見てみよう。区画から東・中央・西の3つの部分に分かれるようである。東部は、(4)の調査範囲である。SD-020(SD-012)の溝によって中央部と区画される。中央の部分は空堀SD-018で西部と区画される。SD-013は浅い溝で、地割りの溝ではなかろう。西部は、SD-018から西側である。東部・中央部には、それぞれ9棟と4棟からなる掘立柱建物群があるが西部にはない。しかし、土坑群を見ると、西部北側のSX-019を囲む土坑群は、掘立柱建物の柱穴の可能性があり(「報告書」第133図)、その東側には壁に沿って柱穴の可能性のあるピットがめぐる方形竪穴遺構SK-350がある。この判断でよいならば、西部にも掘立柱建物が1棟あることになる。

同様に中央の土坑群を見ると、掘立柱建物群の西側にあるSK-160の南側の土坑群も、掘立柱建物の柱穴の可能性があろう。SX-012周辺の土坑群も、掘立柱建物になりそうなものがある(「報告書」第132図)。東部と中央の掘立柱建物群の両方で一帯の土坑群を見ると、掘立柱建物の数が増える可能性がある。また、SB-004の北側から西側のように、掘立柱建物に廂があった可能性を推測できる例がある。ただ、いずれの推定案でも、建物の桁行方向は、北西-南東の方向に揃っている。

上記のような掘立柱建物群の存在、中央と西部の間の空堀SD-018の存在、西側縁の土塁の存在、出土遺物から検出された一連の遺構群から、館ノ山遺跡は中世の館跡と考えられる。館とした場合、上記の遺構それぞれの機能は、どのように考えられるであろうか。

掘立柱建物群は、中央では敷地の東側と北側に集中し、南側から西側は空き地になっている。東側の掘立柱建物の桁行方向は北東-南西である。北側の掘立柱建物は南北2列であるが、南側の列の建物は桁行方向が上述の東側の建物と同じ北東-南西であるのに対して、北側の列の建物では桁行方向が北西-南東である。なお、南側の列の建物の桁行方向は、柱穴の想定の方によっては、90°変わって北側の列と同じになる可能性があると思われ、SB-002は北西方向に3間(柱穴で)のびる推測が可能である。床面積が最も大きいことから、この掘立柱建物が館の中心的な建物であろう。

SB-002とSB-005は、別の建物と報告されているが、両者の間の距離は、それぞれの建物の柱穴の間隔の短い方と変わらないので、繋がっていた可能性もあろう。また、SB-005と西側のSB-004は、その周囲の土坑とともに、桁行方向が北西-南東方向の横長の建物であったと推定することもできる。

館の東部では、掘立柱建物が東・北・西の三方で検出され、検出されないのは南東側だけである。そし



第25図 館ノ山遺跡中一近世の遺構図

て、その南東側は、一段下がった台地整形区画となっている。

東部の西側と中央の東側に掘立柱建物群が並んで、東部と中央の行き来を遮るようであることから、東部と中央の掘立柱建物群は、一体ではなく、それぞれ別のまとまりであったことが推測される。これは東部と中央にそれぞれ井戸があることから支持されよう。面積からは中央の方が主で東部の方が従のようと思われる。掘立柱建物群のこうした様相は、県内の他の中世館跡では見られない。

南北方向に掘られたSD-018の空堀を渡る橋の橋脚跡として、SB-003が考えられる。柱穴の間隔が掘立柱建物よりも狭い。空堀に架けられた橋の遺構は、県内では、千葉市若葉区の高品城跡の1号堀で検出されている。幅4.5mの空堀の底面の地山を両側の底面より0.8m前後高く方形に削り残し、その上面に1間の間隔で2基の柱穴を掘っていた。また、横芝光町の篠本城跡の6号堀でも、橋と推定される遺構が検出されている。高品城の例と似て、空堀の底の地山を両側の底より高く方形に削り残す。ただし、この削り残しの部分には、柱穴のような土坑・ピットはなく、この部分に面した空堀の脇に格子状に並ぶ土坑群が検出されている。『報告書』では橋と櫓門と推定している<sup>4)</sup>。どちらの例も、館ノ山遺跡の例よりも本格的と言えよう。

館跡敷地内の掘立柱建物がない空き地の規模を見てみると、中央の掘立柱建物群の南側は、SD-018の東側までの南北40m、東西50mほどである。これは農作業や人の集まりには十分な広さであろう。この部分の北側を掘立柱建物群と区切るように等高線に沿ってピットが並ぶが、欄干であろうか。これに対して、東部の掘立柱建物群の南東側の空き地は、出入りの通路と考えられるSD-026を除くと、その東側の南北15m、東西15mほどで、中央と比較して狭いと言えよう。こうした空き地規模の違いからも、中央と東部の掘立柱建物群の間には性格の相違が推測される。

館の機能のうちの重要なものとして防御があらう。この点から見てみたい。防御施設の第一は堀と土塁にならう。館の立地する台地は、北東側を除いて谷津に囲まれ、谷津が堀の役割を果たす。谷津の水田面と館の敷地面の比高差は10m以上ある。また館の東側と北側は、館の敷地より5m以上高く、自然地形が土塁の役割を果たしている。西側と南側は、盛りして土塁を築いた痕跡が見られた。注目されるのは、空堀SD-018で、幅5m前後、深さは1m以上ある。これより西側の西部とした区画では、上記のように北側に掘立柱建物の存在が推測できるだけで、中央や東部のような確実な掘立柱建物がない。このことから、館の主要な部分は、中央と東部と思われる。そこで注目されるのが、遺跡を南北に横切る切り通し状の道路である。この道路は、先述のように明治20年以前にあったことが確認でき、北ノ作遺跡・古屋城跡が北側にある台地への南からの進入路になる。その入口を護る施設としてこの館跡が考えられる。館跡の北側には、堀とも言える谷津を挟んで、上記の台地への西側からの入口である尾根状の台地がある。ただ、この尾根状部分の標高が32mほどであるのに対して、館ノ山遺跡北側の土塁とも言える自然地形の高まりは標高が30m～32mと同じかやや低く、防御に不利と思われるので、上記のような推測は控えるのが妥当であろうか。

このような立地と構造が館ノ山遺跡と大変よく似た館跡として、酒々井町本佐倉長勝寺脇館跡がある<sup>5)</sup>。長勝寺脇館跡の存続時期は16世紀を中心とするが、これを参考にすると、館ノ山遺跡を南北に横切る道路は、館の脇を通る道で、館の東側の縁を走ると考えられ、空堀SD-018には、その東側にも土塁があった可能性が高く、空堀の西側は副郭であったと考えることができる。また、道路東側の掘立柱建物がない部分も副郭と考えることができる。ただ、長勝寺脇館跡では周囲をめぐる斜面中段にある曲輪に相当する

遺構が、館ノ山遺跡にはない。

台地の斜面に立地することは防御の面から見ると不利と思われるが、館は領地経営の拠点でもあったはずで、水田面から見上げる格好になる位置に造営することで、水田を耕作する支配下の農民たちに対して威圧感を与えることをねらったということも考えられるであろう。中世館跡に防御機能が弱いと判断される例があり、それらは「屋敷」として「城館」とは区別でき、こうした「屋敷」こそが中世武士の一般的な居住の場ではなかったかとの指摘もある<sup>6)</sup>。館ノ山遺跡もこうした性格の館跡であったと考えられる。

注

- 1 1986 「下総の国四街道地域の遺跡調査報告書－池ノ尻館址・戸崎城址・前広遺跡－」中野遺跡調査団
- 2 1996 「南屋敷遺跡」財団法人千葉市文化財調査協会年報 8 (財)千葉市文化財調査協会
- 3 1998 「高品城跡」『千葉県の歴史 資料編 中世1 (考古資料)』千葉県  
1997 「高品城跡Ⅰ」(財)千葉市文化財協会  
1997 「高品城跡Ⅱ」(財)千葉市文化財協会
- 4 2000 「千葉県匝瑳郡光町籙本城跡・城山遺跡－ひかり工業団地内埋蔵文化財調査報告2－」(財)東総文化財センター
- 5 1990 「千葉県印旛郡酒々井町長勝寺脇館跡」(財)印旛郡市文化財センター  
下記の文献で上記の文献の記述について、遺構の年代等訂正がなされる。  
1998 「本佐倉長勝寺脇館跡」『千葉県の歴史 資料編 中世1 (考古資料)』千葉県  
なお、千葉県の中世城館跡についての包括的な資料集として以下の文献がある。  
1995 「千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅰ－旧下総国地域－」千葉県教育委員会  
1996 「千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ－旧上総・安房国地域－」千葉県教育委員会
- 6 1998 「千葉県の歴史 資料編 中世1 (考古資料)』千葉県  
2000 「千葉県文化財センター研究紀要20」(財)千葉県文化財センター
- 6 2009 「東国における「館」・その虚像と原像」松岡 進 「中世城郭研究」第23号

写 真 图 版

龍ノ山遺跡



遺跡全景



遺跡近景（北から）



SI-159 (北から)



SI-159 (北から)



SI-160 (南から)



SI-160 カマド (南から)



H台地整形区画北東部 (南西から)



H台地整形区画 (北から)



H台地整形区画 (東から)



H台地整形区画 (西から)



丁台地整形区画 (北西から)



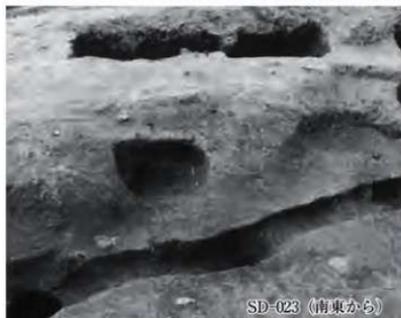
丁台地整形区画 (南から)



SD-020 (北北から)



SD-021・022 (南から)



SD-023 (南東から)



SD-023 (南西から)



SD-024 (北から)



SD-025 (北西から)



図版 6



SK-407 (南から)



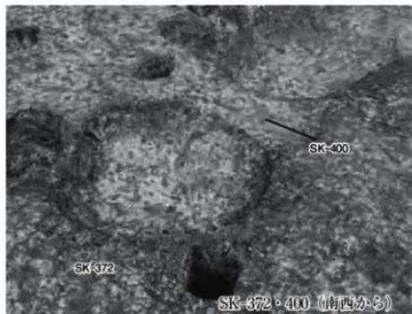
SK-365 (南西から)



SK-367 (西から)



SK-370 (南南西から)



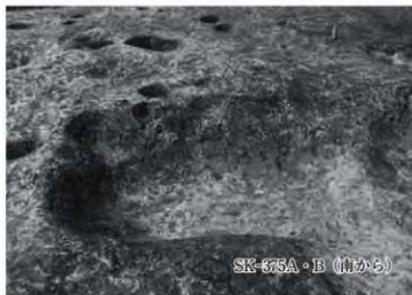
SK-400

SK-372

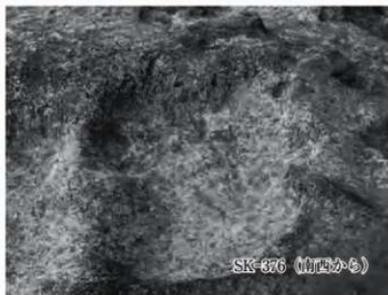
SK-372・400 (南西から)



SK-374 (東から)



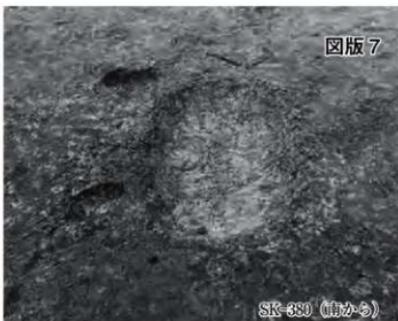
SK-375A・B (北から)



SK-376 (北東から)



SK-377 (南から)

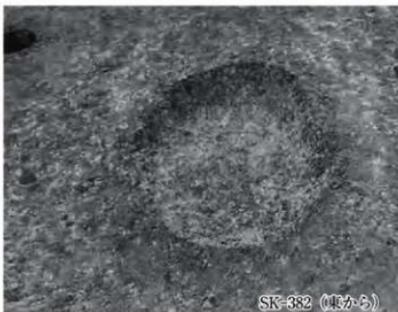


図版 7

SK-380 (南から)



SK-381 (東から)



SK-382 (東から)



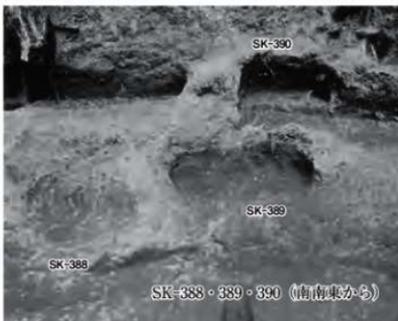
SK-383 (南から)



SK-385 (東から)



SK-387 (南東から)



SK-390

SK-389

SK-388

SK-388・389・390 (南南東から)



SK-391 (南南西から)



SK-394

SK-393

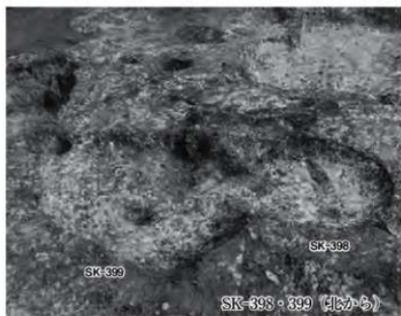
SK-393・394 (東から)



SK-395 (南から)



SK-397 (北東から)



SK-399

SK-398

SK-398・399 (北から)



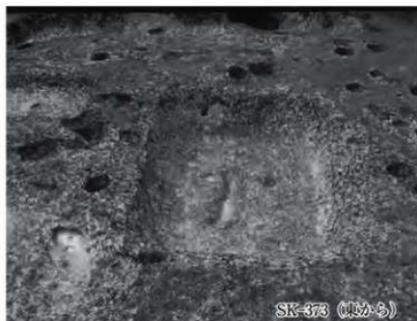
SK-401 (東から)



SK-402 (北西から)

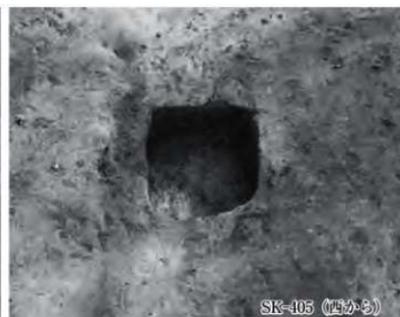


SK-403 (東から)





SK-404 (西から)



SK-405 (西から)



SK-408 (南西から)



SK-408 遺物出土状況



SK-409 (東から)



SK-410 (南から)



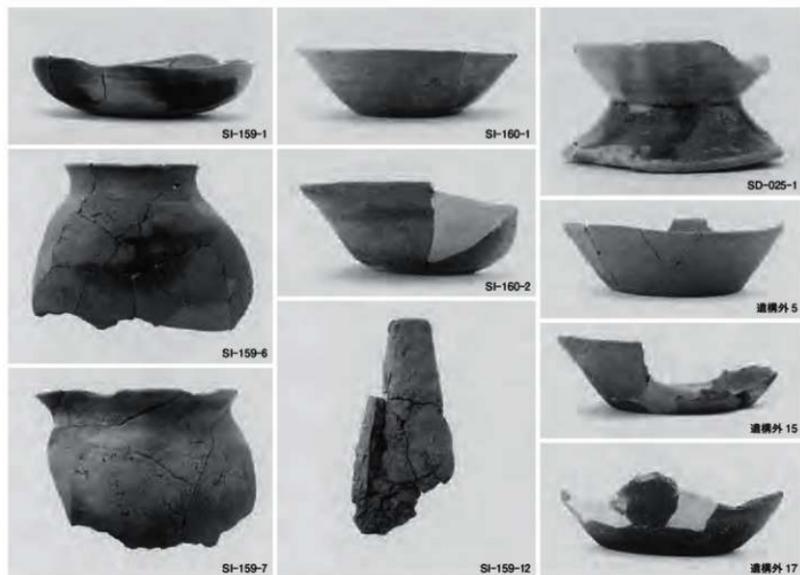
SD-021

SK-363

館ノ山遺跡(4)北東部(南西から)



館ノ山遺跡(5)確認調査状況(北西)



縄文時代石器

砥石



遺構外 47  
DBU-13



遺構外 50  
DBU-12



SK-401-1



遺構外 48  
SD-025



遺構外 49  
DBU-03

## 報告書抄録

ふりがな	よつかいどうしたてのやまいせき 2							
書名	四街道市館ノ山遺跡（2）							
副書名	物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	15							
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告							
シリーズ番号	第718集							
編著者名	蔀 淳一・大岩桂子・山口典子							
編集機関	公益財団法人千葉県教育振興財団 文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡 809 番地の2 TEL 043-424-4848							
発行年月日	西暦 2013 年 9 月 25 日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
館ノ山遺跡(4)	千葉県四街道市 物井字館ノ山	12228	020	35 度 41 分 05 秒	140 度 11 分 45 秒	20110705 ～ 20111104	997㎡	独立行政法人都市再生機構物井地区土地 区画整理事業に伴う 埋蔵文化財調査
館ノ山遺跡(5)	678-1 ほか					20111107 ～ 20111118		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
館ノ山遺跡(4)	包蔵地	縄文時代			縄文土器・石器			
	集落跡	古墳時代	竪穴住居	1 軒	土師器・須恵器			
	城館跡	奈良・平安時代	竪穴住居	1 軒	土師器・須恵器			
		中世	台地整形区画 溝状遺構 欄列 方形竪穴状遺構 掘立柱建物 井戸状遺構 地下式坑 土坑 その他 小穴	3 か所 6 条 1 条 2 基 9 棟 3 基 4 基 41 基 5 か所 98 基	中世陶器・土器・鉄製 品・銭貨・砥石			
館ノ山遺跡(5)	包蔵地	縄文時代			縄文土器・石器			
		古墳時代			土師器・須恵器			
要約	<p>本遺跡は、印旛沼に注ぐ鹿島川支流の支谷に開析された台地上に立地する。平成9年度から平成11年度の調査で、古墳時代後期の集落と中世館跡を検出した。今回の調査範囲はこの調査区の南東部分にあたり、溝状遺構で区画したり、地山を削平したりした台地整形区画内から掘立柱建物群と地下式坑、井戸状遺構などを含む土坑類を検出した。また南東端部分からは、谷津への出入り口通路と考えられる階段状の遺構も検出した。このほかに古墳時代後期と平安時代の竪穴住居各1軒を検出したが、これ以外の集落部分は台地整形により削平された可能性が高い。</p>							

千葉県教育振興財団調査報告第718集

## 四街道市館ノ山遺跡（2）

—物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書XV—

---

---

平成25年9月25日発行

編 集	公益財団法人	千葉県教育振興財団 文化財センター
発 行	独立行政法人	都市再生機構 首都圏ニュータウン本部 東京都新宿区西新宿6-5-1
	公益財団法人	千葉県教育振興財団 四街道市鹿渡809番地の2
印 刷	株式会社	エリート情報社[印刷出版局] 成田市東和田415-10

---

---